

ラストシヤフル

登場人物

横田恭平（よこたきようへい）……………遊び人
水本久美（みずのくみ）……………恭平の恋人
尾早稲重吉（おわせじゆうきち）……………老人、引退した商社マン
尾早稲文代（おわせふみよ）……………重吉の妹
尾早稲政伸（おわせまさのぶ）……………重吉の息子
金子清次・セイさん（かねこせいじ）……………魚屋の息子、
塩野元典・ノリ（しおのものり）……………食品店の息子
丹波吉之・タンキチ（たんばよしゆき）……………金物屋の息子
白川麗・ママ（しらかわれい）……………スナック向日葵のママ
池上律子（いけがみりつこ）……………豆腐屋の娘
向井敏子（むかいとしこ）……………派遣社員
神原公子（かんばらきみこ）……………家事見習い
国江田文二（くにえだぶんじ）……………民生委員
山内忠史（やまうちただし）……………ガードマン

正面奥に微かな照明、暗い部屋、男のシルエット、冷蔵庫を開け、缶ビールの入ったビニール袋を取り出す。ビールを一气飲み、飲み終わった缶を捨て、袋を持って退場。電源ブレーカーが落ちる音、壁の照明が消える。やがて高窓から差し込む月明かり。ぼんやりと浮かぶフローリングの部屋。散らばった本や衣類。上手側にエレベーターがある。タンスの引き出しは引き出されたままで、空き巣に入られた後の様な状態。しばらくして、下手ドアより恭平登場。辺りを懐中電灯で照らす。

恭平

何だよこれ、どういう生活してたんだよここの住人は。ちよつとは片づけろってんだよ。(異変に気づく)…嘘だろ…(ダンスの引き出しを照らす)くっそ。(落胆し、へたり込む。部屋の外で何かぶつかる音)

久美(声)

いたっ、痛い、

恭平

あの野郎。

久美(声)

恭平、ねえどこにいるの、恭平。

恭平

ここだよ。

(下手ドアより懐中電灯を手に久美登場)

久美

あつ、恭平いた。良かった。二階かと思つて上に上がっちゃった。(恭平、久美を無視)ねえ、私おでこぶつけちゃつたの(懐中電灯で自分の顔を照らし)ここんとこ、ねえ腫れてない。

恭平

あんな(恭平も懐中電灯で自分の顔を照らし)俺たち今何してんだ。

久美

何って、

恭平

表で見張ってろって言つたら。

久美

だって、恭平の事が心配だから。

恭平

言われた通りにしろよ。

久美 見張りは要らないと思うけどな。

恭平 何でだよ。

久美 そんなに人も通らないし。

恭平 馬鹿、近所に飲み屋とかあるし夜中でも結構人通りは多いんだよこの辺りは。

久美 そうかも知れないけど、こんな夜中に表で見張ってたらかえって怪しまれるんじゃないかな。

恭平 馬鹿、怪しまれたってな（久美の言う事が正しいと気づく）…とにかく、

久美 分った、恭平の言うとおりにするよ、ごめんね。（出て行こうとする）

恭平 もういいよ。

久美 いいの…ごめん。

恭平 とにかく、お前は声でか過ぎ。

久美 分った、気を付ける。

恭平 それからな…今日はもう帰る。

久美 えっ、どうして、もう終わったの？

恭平 先客だよ。

久美 先客？

恭平 遅かったんだよ俺たち。先に誰かに荒らされてる。

久美 え、(懐中電灯で辺りを照らす)そっかく、変だと思ったのよね。だって上もすごい散らかってたから…そういうこと。

恭平 ついてねえよ。

久美 ねえ、電気点けていい？(壁のスイッチを入れるが照明は点かない)

恭平 馬鹿、電気なんか来てるわけないだろ。

久美 大元かな、(懐中電灯で照らしながら)ブレーカーどこだろ。(下手に消える)

恭平 人が住んでないんだぞここは、何で空家に電気なんか、

(ブレーカーを上げる音、照明が点く、同時に今まで消えていた上手のエレベーターの電源も入り数字や三角の矢印が見える)

久美 (登場) 点いちやった。

恭平 …とにかく、こんな感じじゃ何も残っちゃいねえよ。本当ついてねえな。

久美 ねえ見て、これエレベーターじゃない。すごいね家の中にこんなのあるんだ。いくら位するんだろ。

恭平 いくらしたってエレベーターじゃ持ち出せないだろ。

久美 …また失敗ね。

恭平 おい、またって何だよ、またって。

久美 あ、ごめん、そういうつもりじゃ、

恭平 お前さ、どうして人が落ち込んでる時に余計落ち込むような事言うわけ。

久美 だからごめん、ごめんね恭平。

恭平 普通空き巣に入ってみたら先を越されてたなんて事ないだろ。誰がそんな事予想出来んだよ。

久美 でも、似たような事ばかりだったから恭平の場合。あつ、ごめん。

恭平 お前ね、こんな時に、(携帯のバイブが恭平のポケットの中で鳴る)

久美 こんな時に、電源入れといたんだ。

恭平 マナーモードだよ(携帯を取り出そうとするが、なかなか取り出せない)

久美 普通、電源切っとくよね。

恭平 (やっと取り出し)大事な用かも知れないだろ。

久美 泥棒してる最中に電話に出るんだ。

恭平 ああ出るさ。

久美 もしも今警察に追われてるから手短に。

恭平

あのな、

久美

出ないの。

恭平

出るよ(携帯の表示を見て)くそ、

久美

(察しがつき)貸して。(携帯を取る)

恭平

おい、

久美

(出る)もしもし、

恭平

切れよ。

久美

はい、はい、

恭平

切れって。

久美

いえあの、横田の妹です。

恭平

妹、

久美

兄、携帯忘れて出かけちゃって…ええ、聞いてます。

恭平

切ればいいんだよそんなの。

久美

それは何とかするって兄も言っていました。ただもう少しだけ待ってもらえたら、ええ、でもすぐく反省してるみたいで、必ず返済するんだって言っています。

恭平 言ってねえよそんな事。

久美 あの、兄は本当はいい人間なんです。たまたま今お金がなくて、だからあの、ブラックリストとかに載せるのだけは、

恭平 (携帯を奪い)もしもし、俺横田恭平、そんな金払えないし払うつもりも無いから。(切る)

久美 恭平、

恭平 何勝手に作り話してんだよ。

久美 だって恭平、大きな借金さえ払ったら真面目に働くって言ったじゃん。だったらブラックリストとかに載せられたらまずいじゃない、だから、

恭平 そんなのとつくに載ってるよ。

久美 そうなの、

恭平 そうだよ。それにサラ金に泣き落としは効かないんだよ。何言ってもこつちが金を払うまで奴らはどこまでも追いかけてくるし、逆に金さえ払えばすぐに手のひらひっくり返して、又のご利用をお待ちしてまゝすだ。そんなもんなんだよ。

久美 そうなんだ。

恭平 まったく、何が妹だよ。

久美 …ねえ、恭平。ちゃんと仕事探すんだよね。そして結婚するんだよね、私と。

恭平 何度もしつこい。

久美 だって、

恭平 何で俺を信じないわけ、その為にこんな事やってんだろう。

久美 だけど、

恭平 約束はちゃんと守る。

久美 ……この後、どうするの。

恭平 この後って、

久美 まずは大きな借金返すんでしょ。でも、これ失敗しちゃったし、何か考えなきゃならないでしょ。

恭平 ……狙いは良かったんだよ、ただ運が悪かっただけさ…場所変えるか。

久美 え、

恭平 そうだな、別にここにこだわる必要はないんだよな、世の中金持ちの家はごまんと有るし。

久美 話が違う。

恭平 何だよ。

久美 話が違うよ恭平。

恭平 うるせえな。

久美 恭平言ったじゃん。

恭平 何を。

久美 これは泥棒じゃない、身寄りのないおじいさんが亡くなって、放つといたら役所とかが処分する物を頂いただけだって、誰にも迷惑掛けないって、だから私、

恭平 状況が変わったんだよ。

久美 恭平、それじゃあ只の泥棒だよ。

恭平 しょうがないだろ。

久美 …私、私、（泣く）泥棒の奥さんにはなれない。私、私、

恭平 何だよもう。

久美 （泣きながら）ここに入るんだって、私嫌だって言ったじゃん。

恭平 泣くなよ、泣くなって、

久美 私、私、生まれて一度も人の物なんか盗った事ないもん。

恭平 あのな、だからそれはな、

久美 本当に、本当に嫌だったんだよ。だけど恭平が、誰にも迷惑掛けないって言ったから、サラ金から解放されたら真面目に働くって言ったから、だから私、私、

恭平 よし分かった、俺が悪かった、悪かったよ(久美の両肩を掴み謝る、謝るから泣くなよ。

久美 それなのに、ここがダメだから他の家に泥棒に行くなんて、

恭平 本気じゃないよ。お前があんまりしつこいからさ、だから俺もついな、

久美 嘘、状況が変わったなんて言ったじゃん。

恭平 勢いで言ったただだよ。俺だってさすがにそこまで落ちぶれたくはないって。

久美 本当。

恭平 ああ。

久美 じゃあ何を当たるなんて無しだよね。

恭平 ああ。

久美 良かった。

恭平 あのな久美、確かに俺は今までアンラッキーなところがあってさ結構失敗もしたよ。

久美 失敗だらけだもんね。

恭平 そうだよ失敗だらけだよ、ここんとこずつともがき続けてるって感じだよ、結果も出ないし。だ
けどそれは努力だろ。じゃあ俺は一体誰のために努力してんだよ。

久美 私のため、

恭平 そうだよ、お前のためだろ久美。

久美 そうよね。

恭平 正直言つて、ちやらんばらんな俺はさ、毎日面白おかしく暮らせたならそれが一番だと思つてたさ。だけどお前と一緒になるつて決めたから今こうして頑張つてんだろ。

久美 そうだよね。

恭平 信じてくれよ。

久美 ごめんね、本当は信じてるのよ恭平の事。でも私弱いから、ちょっとダメだともう全部ダメだつてなつちやうのよね。

恭平 お前、普段明るいくせにちよつとした事で悲観的になる傾向があるよな。

久美 ごめん。もつと明るく考えるようにするね。

恭平 そう言う事。ポジティブ、ポジティブ。(久美の顔を覗き込み笑う)そうだ、久美、この状況もまだ諦めるのは早いかな。

久美 えっ、

恭平 もしかしたら先客が見落とした物が残ってるかも知れないぞ。

久美 見落としたもの、

恭平 だからさ、大した物じゃなくても、見つけにくい所に隠したへそくりとかさ。せつかく入ったんだし、ダメもとで探してみようぜ。

久美

そうね。

恭平

案外残ってんじゃないかな。

久美

残ってるかもね。

恭平

(落ちている本を手に取り、ページを繰りながら)こんな本の中に現金挟んでたりとかさ。(タンスに向かい)あと引き出しも中に敷いてる新聞紙の下とかさ。

久美

額縁の裏とか、床の間の壺の中。

恭平

そうそう、

久美

宝探してみたいね。

恭平

よし、久美は別の部屋探しな、ここは俺が担当だ。

久美

うん、なんか楽しくなってきた。

恭平

どっちが先にでかい獲物見つけるか、競争だ。

久美

ようし、負けないよ。(上手ドアに)私こっち見てみるね。(退場)

恭平

がんばれよ。めでたい奴だ。(携帯を取り出しダイヤル。発信音)あ、エリちゃん、俺、恭平君。誕生日おめでとう。店もう終わったんだろ。ごめんね、顔出しかっただけど急に仕事入っちゃって。え、あ、電話くれたんだ、そうか。いや電波の入りが悪い所にいたから。うん、うん、花届いた、結構綺麗でしょ。普段花なんて買わないから、ちよっと照れくさかったけど、エリちゃんの喜ぶ顔がみたくてさ。気にしなくていいんだって、俺の方こそこの間は仕事の愚痴ばっか

り聞かせちゃって、お詫びの印だよ。それはこっちのセリフ、エリちゃんの方が優しいよ。俺のつまらない話を親身になって聞いてくれて、エリちゃんはさ、目に嘘がないんだよね。ぶっちゃけ水商売やってる子にもこんな純な子がいるんだって驚いたもんマジでマジで。俺も酔ってたから話ぐどかったよね、ごめんごめん。弁護士なんて仕事も結構ストレスたまるんだよね。うん、うん、そうそう、それでさ、エリちゃん今度の、

久美
恭平。

恭平
あ、ごめんキヤツチ入った、こんな時間にクライアントから電話だ。参ったな。また店に顔出すから、その時にゆっくりと、本当にゴメンね、じゃあ。

久美
（上手ドアより登場）恭平、今電話してた？

恭平
う、うん、ていうか、電源切ったつもりが切れてなくてさ、さっきのサラ金だよ。

久美
そっか、

恭平
しつこいよな、まったく。なんだよ。

久美
あのね、廊下の角に電話があったのね。

恭平
そりゃあ電話くらいあるだろ。

久美
じゃなくて、その電話、留守電のランプがピコピコしてたのよ。それで私なんだろって思って聞いてみたの。

恭平
メッセージか、

久美
うん、そしたらさ、駅前の銀行からで、定期預金がもうすぐ満期になるから引き続きお預けくだ

さい、みたいな話なの。

恭平 銀行の営業か。ちくしよう、そんな電話が掛かってくるなんて、相当預けてんだな。

久美 そう思うでしょ。

恭平 百万、二百万じゃそんな電話掛かってこないさ。

久美 だよ。

恭平 有るところには有るんだよ金なんて。だけどその通帳も先客の奴が持ってっちゃったんだよな。多分。本当にもう一足早けりやな。

久美 でも分んないよ。もしかしたら恭平が言ったようにまだここに有るかも。

恭平 まさか、いや、そうだよな。可能性がないわけじゃないよな。一千万、二千万なんて事もな。

久美 でしょう。

恭平 よし、こいつは本腰入れて探さなきゃな。久美、作戦変更だ、二人してまずこの部屋から片付けよう。

久美 一緒にやるの？

恭平 そう、一部屋一部屋順序良くだ。

久美 分った。

恭平 日が昇るまで徹夜でやれば時間はたっぷりある。

久美 隅から隅までしらみつぶして事ね。

恭平 そういう事だ、(二人でそこら中に転がっている物や家具の中、飾りの置物を調べ始める)久美、あり得ないような所もちゃんと見るんだぞ。

久美 分った、

恭平 何か残つてるとしたら、誰もが見落とすような所だからな。

久美 見落とす様な所ね。例えば(冷蔵庫を開けながら)冷蔵庫の中とかも。

恭平 甘い、冷蔵庫だったら中に入ってる竹輪の穴も残らずチェックだ。

久美 なるほど、(竹輪を見つけ)あ、本当に入ってた。

恭平 (ベッドの上に飛び乗り、壁に掛かった額縁をひっくり返したりしながら)出てこい、出てこいお宝さん、

久美 (竹輪を) あれ、

恭平 絶対見つけてやるからな。(ベッドの毛布を剥がす。壁とベッドの間に落ちていた人間の足が現れる。二人は気づかない)くそ、どこなんだ。

久美 (竹輪を) ねえ、これ新しいよ。

恭平 だったら食っちまいな。

久美 そういう事じゃなくて、一緒にはいつてるレシートも今日の日付なのよ、ていう事はさ、

恭平 久美、しゃべってないでちゃんと探せよ。

久美 だけどこれさ(足に気づき) …恭平、恭平、

恭平 何だよ。

久美 そ、それ。

恭平 (足を見る) ん？

久美 それ、もしかして、

恭平 な、な、な、何だよこれ、ひ、ひ、人、人、人、人、

久美 人の…足だよ、

恭平 (覗き込み) く、く、く、久美、ひ、ひ、ひ、ひ、人が、死んでる。

久美 恭平、

恭平 うわ、(パニック)

久美 落ち着いてよ恭平。

恭平 そうだ、落ち着け、落ち着け、落ち着け、(怒鳴る) 落ち着けよ久美。

久美 何言ってるの。

久美　もうべたべたに付いてんじゃん、

恭平　どうしよう。

久美　どうしようって、だいたい私達、こんなことやるのに何で手袋もしてないの。

恭平　ごめん、忘れてた。

久美　恭平。

恭平　くっそ。

重吉　う、うくん、

恭平　ん？

久美　恭平、

重吉　あ、たたたた、うくん、

恭平　…生きてるってか、

重吉　おい、おい、

久美　…恭平、どうしよう。

恭平　逃げよう、逃げよう久美。

久美 放つとくの、

恭平 しょうがないだろ。

重吉 お、おい、

(久美、重吉を覗き込む)

恭平 久美、

久美 大丈夫ですか、(恭平に) お爺さん。

恭平 関係ねえよ。

久美 このままじゃきつと死んじゃう。

恭平 とにかく逃げよう。

重吉 お、おい、おい、(手が見える) 引っ張ってくれ。

久美 ちよつと待ってね、

恭平 やめろよ。

久美 (重吉を引っ張り上げようとする) よいしょつと、(上がらない) 重い、もいつかいいきますよ。
よいしょつ、(無理)

恭平 どけよ。(久美を押しつけ重吉を起こす)

重吉

いた、いたたた、痛い、たたたた、（重吉、ベッドの上に座る）ふう、ひどい目にあつた。（一息ついた後、恭平と久美を見据える）

久美

あの、大丈夫ですか。

恭平

俺たち、その、何て言うか、

久美

怪しい者じゃないんです。

恭平

そう、あの、只の通りすぎりで、

久美

（恭平に）家の中で通りすぎりなんて無いでしょ。

恭平

そ、そうだな、俺たちあの、

重吉

（恭平に）いつ帰つたんだ。

恭平

え、

重吉

帰るんだったら、なぜ連絡を入れん。

久美

あの、

重吉

お前はいつもそうだ。

久美

（恭平に）知り合い？

恭平

んなわけないだろ。

重吉 政伸、

恭平 へっ？

重吉 政伸、

久美 ねえ、どうなってんの、政伸って誰、

恭平 そうか、呆けてんだよこの爺さん。俺を誰かと勘違いしてる。

久美 え、

恭平 そっか、話を合わせりゃいいんだよ。

重吉 政伸、

恭平 はい、

重吉 その女は誰だ。

恭平 あ、こいつ、俺の友達。

重吉 ガールフレンドか。

恭平 まあ、そんな感じ。

久美 そ、そう、えっと、政伸のガールフレンドです。よろしくお願いします。

重吉 (久美をじろりと睨み、恭平に) 商売女か。

久美

えっ、

重吉

お前が連れて来たんだ、どうせろくな者じゃないだろ。

久美

何よ、失礼ね。

恭平

(耳打ち) 気にすんなって。それより通帳とハンコ、どこにあるのか聞き出そう。

久美

何言ってるのよ恭平、嫌よ私、お爺さん死んでないじゃん。

恭平

堅い事言うなよ、

久美

信じらんない。

恭平

呆けた爺さんが金持っても意味無いだろ。俺らで有効活用してやろうぜ。

久美

嘘つき、

重吉

政伸、

恭平

はいはい、何でしょう。

重吉

水をくれ、喉が渴いた。

恭平

水、はいはい、(久美に) 水だってよ。(久美、仕方なく冷蔵庫に、後を追う恭平) お年寄りには親切にしようぜ。

久美

(ミネラルウォーターを取り出しながら) 死んでなかったんだから、計画は中止よ。

恭平

なあ、久美、

久美

コップ探してくる。(上手に消える)

恭平

(重吉を見る) …孫かな。水すぐ持ってくるから、お爺ちゃん、(重吉、怪訝そうな顔) なんて、お父さん。

重吉

うん。

恭平

息子か。

(久美、コップを持って登場。久美に愛想笑いする恭平)

久美

知らない。(コップに水を注ぎ残りの水を冷蔵庫に戻す)

恭平

なあ、二人の未来の為にさ、

久美

やっぱり初めからその気だったんだ。

恭平

そうじゃないよ、そうじゃないけどさ、一千万二千万、へたすりやもつとあんだぞ。

久美

どいて、

恭平

俺がやるよ。(久美からコップを受け取り) 息子だったさ。(コップを重吉に) 父さん、こぼさないように気をつけてよ。(飲み終わったコップを受け取り) もういいの、(久美を見て笑う)

久美

最低、

恭平 成り行きだよ成り行き、こういう展開なんだからしょうがないだろ。

(ドアホーンの音)

久美 こういう展開なんだ、どうすんの、

恭平 まさか、警察、

久美 どうすんのよ、

(再びドアホーン)

清次(陽気な声) ごめんくださうい、ご隠居さうん、ご在宅でしょうから。

久美 警察じゃ、ないみたい。

恭平 誰だよ、こんな時間に。

清次(声) 魚屋でうす、宝川商店街の魚金でうす、

久美 魚屋だって、

恭平 何で夜中に魚屋が来んだよ。

重吉 政伸、客だ。

恭平 あのと、もう遅いから、放つところよ。(再びドアホーン) しつこいな、

久美 恭平、

恭平

こんな夜中に訪ねて来る奴がどうかしてんだ、放つときや帰るさ。

清次

あの人、電気点いてますよね。

久美

恭平、

恭平

まさか入っちゃこないって。

清次

おじゃましますよ、もうお休みかな、

久美

入ってきてんじゃん、

恭平

何だよ。

清次

(声) ご隠居、俺どうしても今夜中にさ、

恭平

久美、隠れる、(恭平ベッドの下に隠れるが尻が見えている)

久美

隠れるって、

(下手ドアが開き野球のユニフォームを着た清次登場、久美入れ違いに開いたドアの後に隠れる)

清次

(酔っている) どうしても今夜中にご隠居に謝んなかったらさ、俺眠れねえからさ、(重吉を見て) あ、ご隠居いたね。改めまして、七代目魚金の清次です、ご隠居、この通りだ、申し訳ない。

(土下座)

(久美はドアの後ろから見ている)

重吉

政伸、客だぞ。

清次

客、俺、客なんて大げさな者じゃないすよ、とにかく、俺ね、本当に申し訳なくってさ、いや、遅いのも分ってるんですよ、だけどね、だけど俺…(座ったまま前のめりに倒れ、いびきをかく)

久美

(顔を出す久美、恭平に近づき) 恭平、恭平、(ベッドの下から出ている恭平の尻を叩く)

恭平

いて、(顔を出す)

久美

寝ちやった、ただの酔っぱらい。

恭平

酔っぱらい、

久美

でも、ご隠居、ご隠居って、知り合いかもね。

恭平

とにかくまずいな、

久美

目を覚ます前にここ出よう。

恭平

そうするか。

久美

(清次、突然顔を上げる) うつぶ、

清次

起きちゃった。

久美

(恭平の顔をじっと見た後) はばかり、

恭平

えっ、

清次

便所どこ、うおっぶ、

久美

トイレ、トイレって、

恭平

どこだよ、

重吉

(上手を指し) 廊下の突き当たりだ。

清次

うおーぶ、(走って廊下の奥へ、暫くして唸り声が聞こえる)

久美

何なのあの人、

恭平

あいつだ、

久美

えっ、

恭平

(久美を部屋の隅へ引っ張り) あいつだよ。

久美

あの酔っぱらいを知ってるの？

恭平

だから、駅前の居酒屋で馬鹿騒ぎしてた連中の話をしたろ。

久美

恭平がこの家の事を聞いたって言う、

恭平

そう、商店街の草野球チームの奴らだったって言ったよな。

久美

あっ、

恭平 そうだよ、俺はその時隣の席で一人で呑んでてさ、そいつらは大人数で盛り上がってて、その時にこの屋敷と爺さんの噂をしてたのがあの男だよ。

久美 じゃあやつぱりお爺さんとは知り合いなんだ。

恭平 そんな事は知らねえよ、とにかくこの家の爺さんがものすごいケチで、金は腐る程あるのに商店街の寄付金なんか一銭も出さねえって話をしてたんだよ。身寄りも無いらしいから死ぬ時は墓場まで金を持っていくつもりだろうって。

久美 ちよつと待って、お爺さんは亡くなったって聞いたんじゃないの。

恭平 その時はまだ生きてたんだよ。死にそんな位年寄りだって話だけでさ。

久美 良く分かんない。恭平私に身寄りのないお年寄りが亡くなったって言ったじゃん。

恭平 だから居酒屋で噂を聞いたのは一週間くらい前。そんで俺もちよつとした好奇心でこの家の前を通ってみたのさ、それが三日前。そしたら玄関先に霊柩車が止ってるじゃないよ、俺はてつきり爺さんが死んだと思つた訳さ。

久美 なるほどね、そのちよつとした好奇心っていうのが怪しいけど、やつぱり恭平のいつもの思いこみじゃん。

恭平 そんな噂を聞いた後だぞ、普通誰だってそう思うだろ。

久美 そうかな、

恭平 そうだよ、思うだけじゃない確信するよ。(久美、恭平を見てため息) あれ、何だよそれ。

久美　ごめんね、でも恭平の確信はいつも自分に都合のいい思いこみのよ。

恭平　何だ、

久美　言いたくないけど、多分霊柩車も、ただ黒い車が停まっていたのが恭平にはそう見えたのよ、だから恭平は、(固まっている恭平に気づき)あれ…恭平、

恭平　か、頭来た。

久美　あのね、

恭平　言ったな、言ったな久美、

久美　恭平ゴメン、私言い過ぎた。

恭平　そうか、俺は幻を見たんだ、あれは霊柩車じゃなくてタクシーかトラックだったんだ。

久美　だから、可能性として、

清次　(トイレから戻る) いや、さっぱりしたな。

恭平　(清次に)おい、あんた近所なんだろ、見てないかな霊柩車、三日前、この家の表に霊柩車停まっていただろ。

久美　恭平、

恭平　な、停まっていたよな、見てないかな。

清次　ああ、確かに停まっていたよ、霊柩車。

恭平　　そうか、あんたもあの霊柩車見た、（久美に）聞いたか、聞いたか久美、これでも俺の思いこみか。この人もちゃんと霊柩車を見てるんだよ。

久美　　…恭平、

清次　　見たも何も、あの葬式を仕切ってたのは俺達だよ。

恭平　　は？

清次　　この先の路地を曲がった木下さんちの婆さんが亡くなったんだよ。そういう時は同じ町内のよしみ、みんな手伝うもんさ。

恭平　　木下、さん、

久美　　お婆さん、

清次　　あそこんちの前は道が狭くて車なんか入らないからさ、出棺前の一時間くらいかな、こちらの玄関先に霊柩車待機させて貰ったんだ、何か問題だったかな。

恭平　　あ、いや、

清次　　そうかい。ところでお宅ら、誰？こちらご隠居の一人暮らしの筈だけど、

恭平　　えっ、

久美　　あの、私たち、

清次　　それに、（見回す）この部屋何かあったの。

久美 あく、それは、

重吉 強盗だ、

恭平 へっ、

重吉 強盗なんだ。

清次 強盗、

恭平 あく、あの、

清次 ご隠居、本当ですか。(身構え恭平達を睨む)

重吉 通帳はどこだ、金を出せと脅された。

恭平 そ、そんな事、

清次 この野郎、(恭平の襟首を掴む)

恭平 ちよ、ちよっと待ってくれよ、

久美 違うんです、私たち、あの、

清次 年寄りの一人暮らしを狙いやがったな。

恭平 う、だからそれは、その、

久美 強盗じゃなくて、でも、

清次 警察に突きだしてやる。

恭平 いてててて、

久美 やめてください、

重吉 政伸、

恭平 いてててて、

重吉 政伸、

久美 (叫ぶ) 政伸、

恭平 は、はい、

清次 ん？

重吉 政伸、あの強盗はどうした。

恭平 えっ、あ、あの、

清次 政伸？

久美 二人で、撃退したのよね、政伸。

恭平 そ、そうそうそうそう、この必殺右ストレートでノックアウトよ。

清次

ノックアウト、

久美

でも、しぶとい強盗で、すぐに立ち上がって逃げちゃったのよね。

恭平

そうなんだよ、親父の事が心配で追いかけれなかったのが本当に残念だ。(重吉に駆け寄り)父さん、強盗は逃げちまったよ。

重吉

役に立たんな。

恭平

ごめん、ごめん、

清次

親父って、じゃあご隠居、この二人は、

恭平

息子、息子息子、

久美

そして、息子のガールフレンド。

清次

あ、何だ、そういう事。あそうか、俺もうてつきり、いや参ったな、早く言ってよ、いや申し訳ない。

恭平

いいって事、気にしないで、誤解を招く様な状況だったから。

久美

そ、そうよね。

清次

悪い悪い。でも、強盗に入られたなんて物騒な話だね。警察に連絡は？

恭平

そ、それなんだけどね、とりあえず親父も無事だったし、

久美 そう、それが何よりだもんね。

清次 しかし、

恭平 ところで、おたくは、

久美 何か、ご用ですか。

清次 あ、俺、あくそうだよ。こんな遅い時間に、非常識だよ。いやこれまた申し訳ない。遅いのは分ってたんだけどね、どうしてもこちらののご隠居にお詫びしたい事があって、

恭平 お詫び、

清次 実はね、

(ドアホーンの音)

久美 今度は誰、

ノリ(声) こんばんは、

タンキチ(声) 夜分すみませう、

清次 あ、あの声はノリとタンキチだな、

久美 え、

ノリ(声) 魚金の清さんおじゃましてませんでしょうか。

律子（声）

清さん、隠れたってだめよ、ここにあんたの汚いスパイクがあるんだから。

清次

律子だよ、く、みんな揃ってやんな。

久美

あの、

清次

（叫ぶ）うるせえなく、お前ら今何時だと思ってるんだ、

敏子（声）

清さ、

公子（声）

清さ、

恭平

何なんだよ。

清次

申し訳ない、みんな俺のダチで（ユニフォームを）これこれ、チームメイト。

恭平

それが何でこんな夜中に、

清次

多分俺を追いかけて来たんだな、心配しなくていいよ、すぐに追い返すから。

久美

お願いします。

清次

夜中に騒がしちまって、本当に申し訳ない、（退場）

恭平

ふ、

久美

私たち何やってんの、

恭平

逃げるタイミングのがしたな、

久美 顔だってばつちり見られたし、

恭平 とにかく、魚屋をさっさと追い出して、俺らも早いところからかう。

公子（声） 本当にいいのこんな時間に、

清次（声） そう言わずに挨拶だけしてけて、

恭平 えっ、

久美 まさか、

清次（声） 心配はいらねえって、ざつくばらんない人たちなんだから。

久美 追い返してないじゃない、

清次（登場） もたもたしてねえで、入った入った。

久美 あの、

律子（登場） おじゃまします。

公子（登場） 夜分すみません。

恭平 お、おい、

ノリ（登場） こんにちは。

久美
こんばんはって、

恭平
ちよっと待ってくれよ、

清次
挨拶は全員揃ってからだよ、

タンキチ
(登場) どうも、どうも、

久美
あの、

敏子
(登場) 遅い時間にすみません。

ママ
(登場) 清さんがお世話になってます。

清次
全員入ったか、しかしお前ら良くここが分ったな。

律子
何言ってるのよ、あんな話の最中に居なくなっちゃたんだから、すぐに分るわよ。

敏子
清さんの性格だもん、ねえ。

ノリ
だけど清さん、常識的に言ってこの時間は無いよ。

タンキチ
そうだよ、

清次
ばか、世の中には常識に優先する真心つてもんがあんだよ。

ノリ
出たよ清さん得意のフレーズ、

公子
真心は生ものだ、

敏子 新鮮な内にとどけなかったら伝わらねえんだよ。

清次 その通り、

タンキチ 魚金の刺身じゃないんだからさ、

清次 何だと、

敏子 そりゃ清さんの気持ちは分かるけど、

久美 あの、

公子 こんな時間に押しかけられた人の気持ちを考えなきや、

タンキチ そうだよ清さん、へたしたら犯罪だよ。

清次 タンキチこの野郎、お前は大げさなんだよ。

久美 あの、

律子 何言ってるの、ちっとも大げさじゃないわよ、

ノリ そうだ、清さんが悪い、

清次 てめえら寄ってたかって、

ママ 清さん、私もこれはちよつとやり過ぎだと思うわ。

清次 あれ、ママに言われると俺も返す言葉がねえな。

敏子 何ママにだけ素直になってんのよ、清さん。

ママ 心配になってみんなで後を追いかけてきたんだから。

公子 そうよ清さん、こういう事ってね、

久美 (叫ぶ) すみませくん、皆さん(一同静まり、久美に注目) あの、一体、何なんですか皆さん、

恭平 (隅に小さくなって顔を見られない様にしながら) がんばれ、久美、

久美 今何時だと思ってるんですか。もう夜中二時を回ってますよね。他人の家を訪問する時間じゃないですよ。

(しばしの沈黙)

律子 清さん、この人たち？

清次 ああ、紹介が遅れちまって、(恭平を引っ張って中央に) えっと、まず、この人がこちらのご隠居の息子さんで、確か政伸さん、

恭平 あ、そう、政伸です。

清次 そんなもって(久美を中央に) こっちが政伸さんのガールフレンドで、えっと、

恭平 久美です、

久美 何紹介してんのよ、

恭平

あつ、

律子

そう。息子さんなんていらしたんだ……とにかく、今夜は申し訳ありませんでした。おっしゃる通り、非常識な時間にお邪魔してしまつて、清さん、だから言つたでしょう。

清次

律子、

律子

やっぱり、どんな理由があつたとしても、こんな時間に人様のお宅に押しかけちゃいけないよ。

清次

そう、だよな。

律子

お掛けした迷惑は取り返しがつかないけど、お詫びは又日を改めるとして、今夜はこれで退散しよう。

清次

分つたよ。

久美

良かった、分つて頂けて、

恭平

うん、良かった。

清次

じゃあ。

恭平と久美を残し、下手に退場し始める清次達。律子が急に清次を呼び止める。

律子

清さん、

清次

(戻つて来て)何だよ。

律子 念のために聞くけど、勿論こちらに伺った訳はもうお話したんだよね。

清次 …それが、まだちゃんとは、

律子 そうなの、

恭平 でも、それはもう別に、

律子 敏子、あんたどう思う。

敏子 まずいね。

律子 まずいよね。

久美 いや、だから、

律子 公子はどう思う。

公子 このままじゃいけない。

律子 やっぱりそうだよね。

恭平 あの、

律子 チームのエースが不祥事をしでかして、それにうちらも乗った、

敏子 高校野球だったら甲子園出場は夢と散るね。

恭平 はっ？

久美

あの、

律子

しかも、フェアプレイが信条の宝川イールズのエースが、わざとボールを当てに行った、ビーンボールを投げたと思われてる、そんな感じだよ。

ノリ

りっちゃん、そいつはまずいよ、

タンキチ

何とかしなきゃ、清さんだけじゃなくて、俺ら野球が続けられない。

恭平

そういう問題じゃないと思うけど、

タンキチ

りっちゃん、

律子

分った清さん、ここはうちらが盾になってあんたに代わってしっかり謝るから、

久美

は？

清次

律子、

律子

清さんは男の本懐をちゃんと果たしな。

清次

すまねえ。

久美

あの、こちらとしてはすぐに出てって貰えるだけで、

律子

せーの、

一同

ごめんなささい。

律子 本当にごめんなさい、迷惑は百も承知んですけど、きつと話せば分って貰えると思うのね。

ノリ そう、何で清さんが今夜、こんな時間にこちらを訪問させて頂いたのかって、

久美 それはもう結構です。

律子 話せば長い物語、なんだけど、

久美 やめて下さい、

敏子 あ、もちろん、時間はとらせません。

公子 ダイジエスト版でお送りしちゃうから。

律子 話させてよ、じやなきやうちらも眠れないもん、

久美 お帰りください。

恭平 帰ってくださいよ。

律子 何よ、話を聞く位いいでしょ。

恭平 何言ってるんだよ、だいたいあんたらな、

重吉 政伸、

恭平 ん？

重吉 政伸、

恭平 な、何だい、父さん、

重吉 今夜は客が大勢だな、

恭平 ごめんね、うるさくして、すぐに帰ってもらおうから、

重吉 いや、賑やかで、こういうのも悪くない。

恭平 え、

重吉 ゆっくりしてって貰いなさい。

ノリ やっぱりご隠居年の功、

タンキチ 話が分る、

恭平 ちよっと待ってくれよ。

律子 良かったね清さん、

清次 ああ、

敏子 おじいちゃん、ありがとう。

公子 ありがとう。

ママ 清さん、言いたい事あるんですよ。

清次

そうだな。じゃあ、

敏子

清さん、頑張つて、

(一同拍手、久美、恭平なすすべ無し)

清次

ご隠居、まずはこの度の宝川商店街主催交通事故遺児育英基金への多大な寄付、本当にありがとうございます。ご迷惑でした。(深々と礼) そりや金額でびびって急に手の平ひっくり返したようで情けない話だけども、三千万なんて寄付、商店街始まって以来だからさ、ご隠居がそんな事してたなんて知らなくて、俺さっきまで飲んでたママんとこの向日葵で、例によってさんざっぱらご隠居の悪口を言つたのよ、そしたらさ、横で飲んでた民生委員の国江田さんが、急に怒り出しちゃつて、俺、国江田さんに殴られちゃつたよ。それで今度の寄付の話を知つたのよ。本当に申し訳ねえ。思い返せばさ、ご隠居が六年前俺たちの練習グラウンドだった空き地にこのお屋敷をおつ建ててからの因縁だもんな、あ、空き地は元々俺たちが勝手に使わせて貰つただけなんだけどもね。ご隠居もほら、あんまり人付き合ひの良い方じゃないからさ、それに俺たちとは何か人間の種類が違うようでき、こちららガサツだから、そりが合わねえで結構トラブルもあつたよな(急に涙ぐみ声にならない)

敏子

清さん、

タンキチ

清さん、

清次

だけど、けどさ、俺たちは表面だけでご隠居の事を判断して、ちゃんとご隠居の事を知ろうとしてなかつたんだよな。本当に、本当に申し訳ねえ。国江田さんの話だと、近頃じゃご隠居もすっかり身体を悪くして言うしき、俺たちも同じ町内に住む人間として、ここらでいがみ合ひは手打ちにして、何か出来る事があつたら、是非手助けしてえと思つてさ、いや、そうさせて下さいって、お願いに上がったんだよ……ご隠居、この通りだ。(頭を下げる)

ノリ
ご隠居、

タンキチ
ご隠居、

敏子
お爺ちゃん、

(重吉、にっこりと笑う)

ママ
清さん、

律子
あんたの真心が届いたよ。

一同(口々に)
おめでどう、良かったね。

敏子
はいはいはい、(重吉を中心に、左右に久美と恭平を引き寄せみんなを並ばせる)みんな並んで、仲直りの記念ね。(携帯のカメラで)はいチーズ、カシヤ、

恭平
久美、

久美
あ、

清次
いや嬉しい、嬉しいよ俺は、

ママ
本当良かったわね、清さん。

清次
ご隠居、あ、それからお二人さんも、これからはさ、俺たちの事は家族だと思ってよ。

恭平
あ、はい、

久美 ありがとうございます。

清次 いやめでたいよ、なあノリ。

ノリ うん、今となつては笑い話だけどさ、ご隠居とは本当戦争だったもんね。

タンキチ 本当、本当。

清次 律子、こういう機会だからさ、ちよいとだけ、な、

律子 そう来ると思ったよ。そうね、こういう時だし、いいよね政伸さん。

恭平 え？

敏子 カンパイ、

清次 ノリ、タンキチ、角のコンビニで、ビールな。

ノリ あいよ、

タンキチ 行ってきます。(ノリ、タンキチ退場)

ママ 結局こうなるんじゃないかと思つたわ。

清次 今夜は飲み明かそう、なあ政伸さん。

敏子 清さん、乾杯だけよ。

恭平 もうどうにでもしてください。

ママ
じゃあ、私達はちよつと場所を空けましょうか。

公子
そうね、これじゃあね。

敏子
ねえ、この部屋、

清次
今頃気づいたのか、このすつとこどっこい、聞いて驚くなよ、

恭平
あの、清さん、

清次
うん？

恭平
あんまりその、大げさな話にしたくないんで、

久美
そうそう、

清次
あ、そうか、そうだよな、分った。

敏子
何なのよ、清さん、

清次
言わぬが花よ人生はってな、

公子
何よそれ、

清次
いいからとにかく、手伝いの手始めだ、ちやつちやかちやつと、この部屋を片付けようぜ。

律子
そうね、やつちやおう。

(全員で片付け始める)

久美 (恭平に) どうするの、

(恭平「逃げよう」という仕草。上手ドアに向かおうとする二人)

律子 ねえ、政伸さん、

恭平 は、はい、

律子 どこに何を片付けたらいいのか指示してくんない。

恭平 ああ、それはですね、

久美 衣類は全部タンスの中、あと、その他床に落ちてる物は、適当に、その開き戸の中に押し込んで貰えたら、ね、

恭平 うん、

敏子 了解、

(一同、指示されたように片付ける。再び逃げ出そうとする二人)

公子 本は、本棚でいいんでしょ、

久美 お願いします。

敏子 帽子って衣類かな、

恭平
とにかく適当に、

清次
ほらほら、(ドアの辺りから久美と恭平を引き戻し)二人はご隠居と一緒に座って見ててよ。

恭平
ありがとう。

清次
しかし、ご隠居にこんな息子さんが出たなんて、驚いたよな。

敏子
そうよね。

律子
全然見なかったもんね。

恭平
あの、いろいろ事情がありまして、ずっと離れて暮らしてたんで、

律子
いいのいいの詳しい事は、どこの家にも色々あるし。

敏子
そうよ、ただ、こちらにそういう感じの人の出入りが無かったから、

ママ
勝手に身寄りの無いお年寄りって事にしちゃってたのよね。

清次
それもこれも、俺たちが初めからちゃんと近所付き合いしてれば良かったって話よ。

敏子
本当、そうよね。

清次
あ、そう言やあこつちの事は何もはなしてなかったよな。俺たちは宝川商店街の草野球チームで
イールスってのよ。

久美
はあ、

清次

監督が鰻屋で、イールってのは鰻って意味なんだよ。

公子

監督曰く、つかみ所のないチームを目指してるのよね。

敏子

それで、私達はイールスの私設応援団、ピンクイールス。

律子

まあ、本気で応援してる訳じゃなくて、いつも一緒に飲んで騒いでるだけ、清さん達とは腐れ縁
でき、

敏子

あと、ママは私達のたまり場、スナック向日葵のオーナーで、イールスの知恵袋。

律子

昔は銀座でお店やってたのに、何故かこんな下町に居着いちやった変わり種なのよね。

ママ

こっちの方が性に合うだけ。

公子

ねえねえ、政伸さんて仕事は何やってる人なの。

恭平

え、俺はその、

ママ

弁護士さん、

恭平

えっ、

ママ

…違うか、

恭平

あの、

ママ

何となく、そんな感じかなって、

恭平 俺、今は求職中で、

ママ そう、いい仕事見つかるといいわね。

公子 (エレベーターのボタンを押す) あ、開いちゃった。(ドアが開き中には車イス) 何これ、かわいい、ちっちゃな車庫みたい。ねえ、政伸さん、この車イスはどうしたらいい。

恭平 え、そうだな、どこか適当に、廊下の奥にでもかたしといてよ。

ママ 車イスはベッド脇でしょ。

恭平 え、あ、そうか、親父さんが、

清次 政伸さん、もしかして知らなかったのかい。ご隠居、一月位前から車イスなんだよ。

律子 買い物とか不便だろうからって、民生委員の国江田さんも色々手助けしようとしたんだけど、みんな断ったみたい。

恭平 そうなんだ、

清次 そうなんだって、あんた息子だろ、

恭平 うん、まあ、そうだけど、

清次 だったら、あんたがしっかりしてくれよ。

恭平 そうだよな、いや、だから遠くに住んでたから、ずっと連絡も取れなくて…帰ってみたら車イスか、いや参ったな。(笑う)

(一同、恭平に冷ややかな視線)

公子 遠くって、どこなの、

恭平 え、あく、北海道だよ、

清次 それだって電話位できるだろ、今時日本に住んでて、連絡がとれないなんて言訳だろ。

恭平 それは…。

敏子 車イスだけじゃ無いの、(重吉を伺いながら) お爺ちゃん、近頃話す事とか、様子も変だって、

律子 まあ、私達もさつき国江田さんから聞くまで、全然知ら無かったんだけどね…。

敏子 ついこないだまで清さん達と本気でやり合ってたのに、こんな事になってたなんて…。

恭平 そうか、なるほどね、でもほら、人間誰だって歳はとるし、しょうがないよね、こればかりは。

清次 だから、何なんだよその言い草は、

恭平 えっ、

清次 俺っただってこんなに心配してるのに、あんた、よくそんな人事みたいな言い方が出来るな。

恭平 いや、そういうつもりじゃ、

清次 ご隠居は自分から助けてくれて言うような人じゃねえだろ、だから息子のあんたにさえ連絡しなかったんじゃないのかい、だったらあんたの方から連絡でも何でもするのが、

ママ 清さん、それ以上は家族の問題よ。

清次 …そりゃ、そうだけどさ、

ママ それに、これまでの事はともかく、政伸さんもお父さんの事が心配になったから、又一緒に住もうってこうやって帰ってきたんでしようから。

清次 そうなのかい、

恭平 あ、うん、そういう事だよ。(久美、怪訝そうに恭平を見る) 長い事親不孝したけどさ、そろそろ親の面倒位見なきゃな。

清次 政伸さん、

久美 あのさ、恭へ、(恭平に遮られる)

恭平 それに、もうすぐこいつと結婚するんで、ちょうどいい機会だしね。

久美 ちよつと、(恭平を引き寄せ、耳打ち) その場しのぎの言訳、それとも作戦、

恭平 本気だよ。

久美 もう思いつきでいい加減な事言うのはやめて、常識無いけど、すごくいい人達じゃないの、こんな人達を騙したら、

恭平 (他にも聞こえるように) 久美、よつく聞いてくれ、急にこんな事言い出して、お前はきつと面食らつてると思うけどな、俺は本気で言ってるんだよ。

久美 やめてよ、

恭平 俺はさ、単純に皆さんの気持に感動したんだ。赤の他人だよ、赤の他人の清さん達がここまで一生懸命になってんだよ、俺、自分が恥ずかしくなったんだよ。

敏子 政伸さん、

久美 そんな予定じゃ無かったじゃない。

恭平 そう、確かにちよいと顔を出してすぐに出て行く筈だったけどさ、ここに住んで親父さんの面倒を見る事にした。

久美 本当は、違う事を考えてるでしょ。

恭平 考えてねえよ。

久美 そんなの無理に決まってるでしょう「政伸」。

恭平 そりゃあ色々不都合や問題もあるけどさ、

久美 無理、不可能、あり得ない、

律子 久美さん、親が年取って身体が弱くなったら、

恭平 (律子を手で制し) 無理も無いんだよ、こいつは俺の事をよく知ってるから、俺今まで本当にいい加減だったから、

敏子 久美さん、政伸さんを助けてあげてよ。

公子 久美さん、

律子 今まで何があつたか知らないけど、もう一度信じてあげたら、

久美 …。

清次 (久美の手を取り) もう決まりだよ、そういう事でいいだろ。

タンキチ (声) ただいま。

律子 祝いの酒盛りだね。

敏子 めでたいね、本当にめでたいよ。

タンキチ (ノリと一緒に登場) お待たせ、お待たせ、

ノリ つまみも酒も足りなきやいくらでも追加オーケーだよ。

公子 勘定は清さん持ちだよ。

清次 あたぼうよ、勘定でも何でもドンとこいだ。

敏子 清さんめずらしく太っ腹、

律子 (清次の腹をなでながら) 近頃本当に太っ腹だよ、清さん、

清次 何しやんでえ、

タンキチ そろそろコレステロール心配しなきゃ、

清次

何だと、

ノリ

いざとなつたらご隠居と一緒に俺達が面倒みるよ、な、清さん、

清次

(恭平に) こういう奴らだよ。野菜も虫食いの多い方が安心して食えるっていうけどさ、こいつらも見てくれの悪い分中身は保証付きだよ。

(照明次第に暗くなる。クロスして下手に一人離れる久美にスポット)

律子

見てくれまであんた達と一緒にしないでよ。

敏子

身も心も美しく、

公子

ピンクイルスのモットーです。

清次

口は悪いが人間は真つ正直だ。江戸っ子は、

久美(声)

(遠く聞こえる清次達の声をバックに) どうしよう、恭平はまだきつと、お爺さんのお金を狙ってる。

タンキチ

はいはい、五月の鯉の吹き流し、

ノリ

口先ばかりで腸は無しつてんだよな、清さん。

清次

ノリ、タンキチ、てめえら俺の言う事をいちいち先回りするんじゃないよ。

公子

清さんの決め台詞は耳ダコだもんね。

ノリ

そういう事、そういう事、

久美(声) この人たちの優しさは何なんだろう。

ママ りっちゃん、車イスこっちに、

律子 えっ、

ママ 御隠居さん、多分お手洗いでしょ、

清次 分かった、ここは俺に任せな、

ノリ 清さん酔ってるからダメだよ、俺がやるよ、

久美(声) 何か、不思議な、懐かしい優しさ…。(照明F0)

闇の中、上手に眠る恭平にスポットF1、やがて窓の外が白んで来る。眠っている恭平を見下ろしている律子と敏子と公子。

公子 政伸さん、政伸さん、(恭平、眼を覚ます) お早う。

恭平 …お早う…まさのぶ? あくそう政伸だよ俺、お早う。

律子 何寝ぼけてんのよ。

恭平 いや。そっか、みんな結局、

公子 そ、朝までね。

律子 政伸さん、ゆうべの酒まだ残ってるんじゃないの。

公子 お酒意外と弱いよね。

恭平 (苦笑) そうかも。飲むのは好きなんだけどね。

敏子 て言うか酒に飲まれるタイプだよ。

恭平 え、そうかな、

敏子 そうだよ。

律子 楽しく飲むのはいいけど、酔って愚痴るのは格好悪いよ。

恭平 愚痴ってた俺、

公子 かなりグチグチ。

恭平 そうか。

敏子 それより誰かれ構わず口説こうとする方が最悪だけどね。

恭平 そんなことも、

敏子 久美さんに「ごめんなさい、酔っ払ってるから気にしないで下さいね」
て言わせちゃって、彼氏としては最悪。

なん

恭平 いや、酔ってたから、

律子 言い訳になんないよ。

敏子 マジやだ。

恭平 マジやだって、

公子 ねえりっちゃん、久美さん、この人のどこがいいのかな。

律子 そんなもんよ、いい女に限ってカス掴んじゃうのよ。

恭平 カス、

敏子 (公子に)特にね、母性本能が強い女は気をつけないとそうなんのよ。

公子 よ。あ、「あたしがいなかったらこの人はダメになっちゃう」なんて思っ

ちやうんでし

人、笑) 「あんたいてもいなくても元々ダメ男だから」って突っ込みたくな

るよね。(三

恭平 おい、

律子 母性本能か、ウチラの場合は関係無いね。

公子 それはそれで寂しいけど。

敏子 変なの掴むよりましでしょ。

公子 (恭平を見ながら) まあね。(笑う三人)

恭平　ちよつと待ってくれよ、

律子　（名刺を恭平に突きつけ）ハイこれ。

恭平　ん、あつ、

敏子　「クラブ・ぷりんぷりん」のエリちゃん。

公子　政伸さんのポケットから落ちたのよ。

恭平　あの、それは別に、

律子　ウチラやっぱ女だからさ、こういう事に関しては久美さんの味方なの。

敏子　昨夜話し込んだじゃったけど、本当いい子だよ、久美さん。

律子　あんな人泣かせちゃダメ。

公子　ダメだからね。

恭平　あの、

敏子　いいから、長生きしたかったらウチラの言うこと聞くの。

恭平　へ、

律子　（笑い、名刺を破り恭平に渡す。敏子と公子に）そろそろ行くか。

敏子　　そうね。

公子　　じゃあね、政伸さん。

下手に退場する三人。視線で見送る恭平。上手より向日葵のママ登場。気づかない恭平。

恭平　　何なんだよ、まったく。

ママ　　おはよう、政伸さん。

恭平　　あ、おはようございます。

ママ　　とつちめられたみたいね。

恭平　　え、いえ、

ママ　　ちよつときつかったかも知れないけど、許してあげてね。

恭平　　いや、別にそんな、

ママ　　みんな若いから政伸さん達のこと応援する気持ちと、ちよつと
羨ましいって

羨ましいかな。

恭平　　羨ましい？

ママ　　そりゃあ勿論。

恭平　　…そうかな。

ママ (微笑み)じゃあ、私も行かなきゃ。

恭平 店の支度？

ママ それだけじゃ無いの、こう見えても色々あるのよ、それじゃ。

恭平 じゃあ。

下手に去る向日葵のママをちよつと怪訝そうな視線で見送る恭平。

ノリ (上手奥より登場)政伸さん、(振り向いた恭平と目が合う)はいこれ、(鍵を恭平に渡す)

恭平 えっ？

ノリ 清さんがね、物騒だから新しいのに換えた方がいいって、ついでにワンドアロックにしといた。

恭平 そう、

ノリ 大変だったね、

恭平 話、聞いたんだ、

ノリ かいつまんで。でもご隠居運がいいよ、たまたま政伸さん達が帰ってた時で、

恭平 あの、清さんは、

ノリ もう帰ったよ。

恭平 そっか。あ、あともう一人いたよね。

ノリ タンキチね。

恭平 あ、タンキチ君。

ノリ 帰ったんじゃないかな。

恭平 そう、

ノリ それぞれに仕事はあるからさ。

恭平 そうだよ。しかし、鍵屋って随分早くから来てくれるんだ。

ノリ 鍵取り替えたのはタンキチだよ。あいつんとこ金物屋で、鍵の一一九番ミスターセカンズってのもやってんの、道具はいつも車に乗せてんだよ。

恭平 そうなんだ。

ノリ ついでに俺んちはスーパーで律子さんところは豆腐屋。

恭平 本当に商店街のチームだね。

ノリ 政伸さん仕事探してんだよね、

恭平 あ、まあ、

ノリ 選ばなきゃ何かお世話出来ると思うよ。

恭平 ありがとう。ところであの、久美は、

ノリ ついさつき、ご隠居と二階に上がってったよ。

恭平 二階、何で、

ノリ さあ。政伸さん、うちで店員を募集してるんだけど、条件は免許だけ、どうかな。

恭平 俺、免許無いんで、

ノリ 免許無い、そうか。だったら、律子さんところの豆腐屋なんかどうだろ、朝は早いけど、

恭平 ありがとう。俺腰痛だから豆腐屋は無理。

ノリ じゃあ、とりあえずのつなぎで。ペットショップなんてどう、公子のバイト先で時給は安いと思うけど、

恭平 動物アレルギーなんだよ。

ノリ アレルギー、難しいなあ…あ、でもきつと何かあると思うから、いい話あったら連絡するよ。

恭平 よろしく頼みます。

ノリ じゃ俺、行くから、(下手に向う)

恭平 あ、(鍵を)これ、お代は、

ノリ 何言ってるの、じゃ、(退場)

恭平、エレベーターの方に向かい、ボタンを押そうとする。奥からタンキチの声。

タンキチ(声) うわ、まずい、急がないと。(登場)

恭平 あれ、まだいたんだ。えっと、

タンキチ タンキチ、(頭痛そうに)飲みすぎちゃって、トイレで寝込んでたら置き去りだもん。

恭平 水でも飲む。

タンキチ どうも、でも急ぐんで、

恭平 聞いたよ。鍵ありがとう。

タンキチ ああ、酔ってたからちゃんと使えるか確認しといて。(去ろうとする)

恭平 豆腐屋じゃないんだから、まだ早いでしょう。

タンキチ 金物屋でも俺っち特別なの、

恭平 そうなんだ。

タンキチ じゃあ、

恭平 タンキチ君、大井の方でさ、ちょっとしたイベントやってんだけど、昼間少し抜け出せたら一緒

タンキチ 行かない。

タンキチ イベント？

恭平 うん、黒潮杯って聞いたことある。

タンキチ 何それ、

恭平 お馬さん、

タンキチ …競馬、

恭平 そう。まあG1みたいなビッグレースじゃないけどそこそこ盛り上がるし、男のロマンって奴。

タンキチ 何で俺を誘うの。

恭平 別に意味は無いけど、お近づきの印。

タンキチ …。

恭平 実はね、今日俺絶対勝てる自信のあるレースが幾つかあんのよ。ていうか、もう結果知ってるって位のレースだから負けようが無い訳、で、タンキチ君が軍資金を少し用立ててくれたら、倍返しでお礼出来るしと思ってる。

タンキチ 政伸さん、失業中なんだよね。

恭平 まあそうだけど。ほら、就職活動バリバリ頑張る為にも、その前に少しだけストレス発散、みたいな。人間働き過ぎも良くないし。

タンキチ でも働かないのはもつと良くないでしょ。

恭平 手厳しいな。

タンキチ 政伸さん、俺も昔親を泣かしてた事があってさ。

恭平 そうなの。

タンキチ でもやっぱりまじめに働いた方がいいよ。競馬なんて、

恭平 タンキチ君、急いでんだよね。

タンキチ …昔、俺がぐれかけた時助けてくれたのが清さんなんだ。

恭平 時間大丈夫。

タンキチ 俺もノリも清さんにはホント世話になってんだ。

恭平 男気はありそうな感じだよね。

タンキチ そうなんだよ。清さんってね、

恭平 タンキチ君、ホント急がなくていいの。

タンキチ ちょっとだけいい。

恭平 俺は構わないけど。

タンキチ 俺ね、昔粹がって族に入ってた事あんの。

恭平 暴走族、

タンキチ うん、

恭平

似合わないね。

タンキチ

そうなんだよ。親や先生に反発して入ったけど、自分でも全然居心地悪くてさ、でも抜けるなんて言ったら袋にされちゃうから、怖くて一年位そいつらとつるんでたんだ。

恭平

分かった、そんな時に清さんに助けられたんだ。

タンキチ

うん、清さん俺のために十人位相手に大立ち回り、

恭平

うー、絵に描いたような青春ドラマだ。

タンキチ

そんな感じかな。

恭平

河原で喧嘩してボコボコにされて、土手に転がって夕日を眺めたってか、

タンキチ

いや、ケンカの後近くに土手が無かったから電車に乗って荒川の土手まで行った。

恭平

え、

タンキチ

清さんが、こういう時はやっぱりここだろって、

恭平

馬鹿だねー、

タンキチ

そう、清さん基本馬鹿だから。

恭平

でもいい奴なんだ。

タンキチ

うん、

恭平 で、河原で何話したの。

タンキチ 俺がさ、一度ぐれた人間は元に戻れないんじゃないのって言ったら、清さん、「お前はぐれたん

じゃなくて、はぐれたんだ、お前のことを大事に思ってる親や友達の姿が見えなくなって道に迷っただけだよ」って、

恭平 かつこいいいな。

タンキチ そう、かつこいいいの、だから俺、清さん基本馬鹿なのに、何で時々カッコ良い事言うんだよつ

て。

恭平 そうか、

タンキチ でも三日後に又清さんと二人呼び出されて、

恭平 復讐か、

タンキチ 今度はさ、百人以上、鉄パイプとかチェーンとか持って、中には本物のドス持つてる奴もいたりしてさ。

恭平 絶体絶命、大ピンチだ、

タンキチ 俺もうちびりそうになって、

恭平 そりゃそうだ。

タンキチ そしたら清さん今度はさ、

恭平 今度はどうしたの。

タンキチ 清さんの奴ね、

恭平 うん、

タンキチ 清さんたらさ、あ、俺もう帰んなきゃ、

恭平 え、

タンキチ じゃあ、ゴメン、

恭平 何それ、

タンキチ 俺本当急ぐんで、(退場)

恭平 おい、その後どうなったんだよ、おい、気になるだろ。

エレベーターが下りてくる音。ドアが開き、重吉が車イスで登場。

恭平 あれ…お早うございます。

重吉、恭平を一瞥するがそのまま廊下の奥へ。

恭平 何だよ、結構一人で動けんじゃん。

エレベーターが上がり、又下りてくる。ドアが開き久美登場。

恭平 久美、

久美 お父さんは、

恭平 えっ、トイレだよ。

久美 (久美、廊下の奥へ向いながら) ごめんなさい、私寝ちゃった。

恭平 お父さん？

久美 (声) 大丈夫ですか、必要だったら呼んで下さいね。

恭平 ……どうなってんだよ。(久美に) 久美、お前さ、

久美 (声) なあに、

恭平 二階で何やってたんだよ。

久美 (声) 朝日を見てたの。

恭平 何だ、

久美 (声) 日の出、すごい綺麗だったよ。

恭平 訳わかんねえ。

久美 元々ね、お父さんの寝室二階だったのよ。足を悪くして下で寝るようになったんだって。

恭平 じゃなくて、お前さ、

久美
（エプロンを付けて登場）キッチン冷蔵庫の中、結構食材の買い置きがあるんだけど、使ってもいいよね。これお父さんのみたい、自炊とかしてんだね。でもキッチンすごい事になってるからまず先に掃除するから朝ご飯少し待ってね。

恭平
あのさ、

恭平
それから、食事が済んだら私着替えを取りに帰るから。

恭平
えっ、

久美
恭平のも適当に持って来るね、しばらくここに居るとなると結構な荷物ね。

恭平
お前、

久美
恭平そうしたいって言ったじゃん。

恭平
いや、言ったけど、

久美
あ、そうそう、これからは政伸って呼ぶから。

恭平
久美お前考えてんだよ。

（ベッド脇の子機が鳴る。電話に出る久美）

久美
もしもし、あ、はいはい久美です。ええ、ええ、早速調べてくれたの、ありがとう。うん、うん、分った、区役所の中の福祉事務所ね。うん、うん、大丈夫、大丈夫、うん、分った。忙しいのにありがとう、じゃあ又今晚。（電話を切る）

恭平
誰だよ。

久美

律子さん、

恭平

何だよ福祉事務所って、

久美

色々役に立つ情報やサービスを提供してるんだって。

恭平

サービス？

久美

恭平の言う通りだよね、赤の他人の清さんや律子さん達が、あんなに一生懸命になってるんだもんね。お父さんの症状はどんどん進んでいくんだし、

恭平

久美、お前、

(再び子機が鳴る。電話に出る久美)

久美

もしもし、あ、はいはい、(恭平に) 政伸だった。

恭平

誰だよ(電話に出る)もしもし、清次？ああ清さん、どうしたの、うん、うん、えっ、何の話それ、俺が、夕べそんな事言ったの、うん、うん、いや酔ってたから覚えてないけど、約束って、いやいやいや、無理だよ無理、どうしてって、俺やった事ないし、いや、だから教えて貰っても出来ないって、それに、俺野球はあんまり、いや、だから、清さん、清さん、(切れる) なんだよ。(苦笑)

久美

本当に変わった人達だよね。

(照明暗くなり、上手ドアにスポット、勢いよく飛び出すイールのメンバー、恭平に基本？を教え始める)

清次 野球の基本はボールの握りだ。

ノリ 人差し指と中指はボールの縫い目に直角で、

タンキチ 優しくしっかりと掴んでやろう。

清次 守備につく時は腰を落とし、

ノリ 捕球は身体の正面だ、

イールス イエーイエ、イエーイエ、

清次 ファインプレーを狙うより、

タンキチ 堅実な守備が勝利呼ぶ、

イールス そいつはまるで人生だ、イエーイエ、イエーイエ、

清次 打撃の道は愛の道、

ノリ でかい長打を狙うより、

タンキチ ボールを優しく捉えたら、

清次 素直に無心で振り抜きな、

ノリ 夢が天まで飛んでいく、

イールス イエーイエ、イエーイエ、

清次 勝つ事ばかりがゲームじゃないさ、

タンキチ 負けて笑える時もある、

イールス 野球はまるで人生だ、イエーイエ、イエーイエ、

（敏子、公子、四人の頭を丸めた資料で叩く）

律子 いつまでやってんの、

ノリ・タン 痛、テ、テ、テ、

恭平 何で俺まで、

清次 政伸さんにイールスのスピリットをさ、

敏子 お爺ちゃんの病気に關する勉強会の初日なんだから。

公子 真面目にやってね。

イールス あいよ。

ママ （資料を見ながら）でもご隠居さん、こんなパンフレットを集めてたって事は、だいぶ前に自分

でも症状を自覚してたって事ね。

久美 だと思いません。

律子 （資料が入っていた封筒を見ながら）封筒の消印から見て、少なくとも一年前には気付いてたの

よ。

敏子 (施設のパンフを見ながら) どの施設も痴呆症の介護専門だもんね。

公子 でも、これだけ調べたのに、どうして施設に入らなかったのかな。

タンキチ そうだよな、ご隠居だったら費用の心配は無い筈なのに。

清次 きっと、いつか政伸さんが連絡してくれるって待ってたんだよ。

恭平 そうかな、

ノリ そうだよ。

ママ お金を払えばケアしてくれる施設って便利だけど、お年寄りにとって必ずしも魅力的な選択じゃないわよ。

清次 そりゃあそうだ、金で面倒みて貰うなんざ心細いや。

公子 そっか、

律子 それにしてもこっちの、福祉事務所で出してるパンフは、役立つ情報満載だね。

敏子 そうなのよ、とくにね、介護する側の心得が参考になるのよ。

タンキチ (冊子を) 結構種類もあるんだ。

久美 関係ありそうなのは全部貰って来たんです。

公子

さすが、

敏子

(冊子を見ながら)痴呆症の患者さんにとっては、自分の存在が認められているって感じる事が
必要なんだって、頼りにされてるって思える事とかさ。

ママ

人間みんなそうよね。愛されてるとか必要とされてるって感じる事は直接生き甲斐に繋がるわ。

公子

それが基本か。

律子

これにはね、子供扱いするのが一番良くないって。

清次

そうだよ、特にご隠居みたいに昔随分偉かった、てな人には、プライドでもんがあらあな。

ノリ

ご隠居って、新聞にしよっちゅう名前が出る位有名な実業家だったんだよね、政伸さん。

恭平

うん、

ノリ

民生委員の国江田さんはさ、何でも知ってるんだよ。なあ清さん、

清次

そうだな、国江田の親っさんてのはさ、メガネでさ、一見のろまな亀って感じだけど、鼻が利く
んだよ。

ノリ

そうそう、

清次

みてなよ、ここにも政伸さん達の事を嗅ぎつけてすぐにやって来るから。(イールス笑)

律子

ねえねえ、ちよつとここ注目。(資料を読む)回復を望む事は難しいこの病気ですが、周囲の適
切な配慮と思いやりにより、患者が穏やかな心で残された時間を過ごす事は可能です(律子がパ
ンフを読む声は少しずつF Oしながら、久美の声がF I)大切な事は、家族や周囲の人々が患者

を…。

(イールスのシルエット)

久美(声)

噂の国江田さんはなかなか現れなかったけど、イールスのみんなは、ほとんど毎晩のようにやって来た。そしていつも必ず、お節介だったらごめんねって、話を始めた。

敏子

(上手前、ピンクの三人、スポットの中で) あのね、あのね、あのね、もしお節介だったらごめんね。

律子

ホントこれすごい失礼な話なのは分ってるんだけど、怒らないで聞いてよ。政伸さんも久美さんもとりあえず無職でしょ。そりやお爺ちゃんはお金持ちでも、まだ結婚してない久美さんの立場って微妙じゃん、それにこれまた失礼だけど、政伸さんって、その辺りの事を察してくれるようなタイプにも見えないから、もしかして、もしかしてほら、困ってるんじゃないかなって思って、これ、使ってくんないかな、

公子

ジャーン、宝川商店街お楽しみスタンプ帳、これ一冊で何と、千円分のお買い物が出るの。

敏子

商店街だから、食品から雑貨まで、大抵の物は揃うでしょ、せっかくあるからさ久美さんに使って貰えたら私達も嬉しいのよ。

律子

うちらはさ、ほとんど商店街の中だけで生きてるようなもんじゃん、だから知らないうちにどんだんたまっちゃう訳、でも身内のうちらがこれで買い物するのも気が引けちゃって、もう溜まる一方、こんなだもん(大量のスタンプ帳)

ピンク

お願い使って。(スポット消える)

ノリ

(下手前イールスの三人、スポットの中で) 久美さん、こんな事言っって、お節介なのは分ってるんだけどさ、あの、政伸さんてちよっと遊び人だよ、いや、見てたら分るよ。困ったもんだよ

ね、それで、ちょっと考えたんだけど、俺たちに任せて貰えないかな、

清次 男っていうのはさ、女に言われると腹が立つても男同士だったら大丈夫って事もあるんだよ。

ノリ 俺達で上手い事仲間に巻き込んでさ、きつと定職に就かせるから、な、いいだろ、

タンキチ 大丈夫、俺たち上手くやるって、だって、二人にはずっとご隠居と一緒に居て貰いたいもん。(スポット消える)

久美(声) なぜこの人達は、他人の事に、こんなにも一生懸命になれるんだろう、

ママ (上手前、スポットの中で) 久美さん、遠慮は無しよ。おかしな言い方するようだけど、私達お

手伝いしてるなんてつもりはさらさら無いから。それより、政伸さんと久美さんが私達の出来な
い分をやってくれてる、そんな感じなのよ。(スポット消える)

久美(声) 私が、向日葵のママのこの言葉に、単純な思いやりだけでは無い真実を見つけたのは、ずっと後の事だった。ただこの時の私には、自分たちの事ばかりを考えて、かえって自分たちを見失っている私と恭平の姿が見えてきた。そして本当に不思議だった：イールスのみんなのこの優しさは、本当にどこから来るんだろう。

(暗転)

(上手の恭平にスポットF1、スポーツ新聞を見ている)

恭平 どのレースもガチガチだよな、元手が無きや笑えない銀行レースばっかだ：チロリンキングにヤンサマテイオー、うん、ちょっと待て、あれあれロマンの片鱗が見えてきたかな：最終レース、(時間を見る) 間に合うな、(財布の中を見る) こっちが間に合わない、

(辺りを見回し、舌打ちをし、思いついたようにエレベーターで二階に)

久美 (声)

お父さんお疲れ様、着きましたよ (買い物袋を下げ、車イスを押し上手より登場) えっと、お菓はここ (ベッド枕元のスタンド脇に) に置きますね。(重吉、奥へ行くこうとするが閉まったドアの前で止る) あ、お手洗いかな (ドアを開ける) 一人で大丈夫ですか。

重吉
すまないね、

久美
いえいえ、ここ開けておきますから、必要な時は大きな声で呼んで下さいね。

重吉
うん、(車イスで奥へ退場)

(久美、重吉を見送った後、ベッド上の新聞に気付き、手に取る。しばらく見て戻す。奥へ行くこうとするが、エレベーターの降りてくる音が聞こえ振り向く、ドアが開き、恭平が出て来る)

久美
上で何やってたの。

恭平
別に。

久美
返して。

恭平
えっ、

久美
そっちの手に持ってる物、元の所に返して。

恭平
お前、俺が何かすごい物でも持ち出してると思ってんだろ。(隠し持っていた置物を出し) 質屋が二三千円で取ってくれたらラッキーって代物だよ。悲しいかな財布の中が空っけっただから

さ。

久美

金額は関係ない、元の所に戻して。

恭平

あのな、俺達は爺さんの面倒をただでみてやってんだぞ、これ位の事でガタガタ言うなよ。

久美

とにかく返して。

恭平

さっきな、銀行からまた電話があったんだよ。それで、息子だけど親父幾ら預けてんのって聞いたんだよ、教えてくんないのな。しょうがないから満期になった定期預金の話だったら、その内親父の体調がいい時に手続きさせるよって言ったら、承知しましただってさ。まだあるんだよこの家のどこかに。だけど見つからないんだよな。なあ、通帳や印鑑、家の権利書とか、どこにあるのか聞いてくんないか、お前爺さんとは本当の家族みたいじゃん。ストレートに聞いたら案外教えてくれるんじゃないか。

久美

恭平は、結局変わらないんだね、何があっても。

恭平

何だよそれ、

久美

私ね、これが最後だと思ったんだ。これに賭けてダメだったら、恭平の事諦めようって。

恭平

何言ってるんだよ。

久美

恭平はさ、ここに入ろうって言った時、これがラストシヤフルだって言ったよね。手札が変わればツキも変わるから、もう一度だけカードの切り直しだ、俺を信じてくれて、

恭平

そんな事言ったっけ、

久美

でも私はさ、恭平の言う事は信じてなかった。いつものホラ話、うまくいったら真面目に働くなんて言いながら、カードゲームの例えで説得するギャンブル好きの男の話、信じられないで

しよ。

恭平 だったら何でついて来たんだよ。

久美 そう、ついて来なけりや良かったのよ。でも私は恭平と別れたくないから自分をごまかして、恭平を信じてるって無理矢理思いこんだ、本当に無理矢理。そしてこのこついて来て、あの晚イールスのみんなに出会った…本当にびっくりしたんだよね。こんないい人達がいるんだって、そして思ったの、この人達にだったら賭けられるって、

恭平 何だよそれ。

久美 恭平が、お爺さんの面倒みるなんて言い出した時、私だって恭平の本当の目的は分ってたけど、イールスのみんなと付き合ったら恭平も変わるんじゃないかなってそう思ったの。よし、その可能性に賭けてみようって、もしそうなる前に正体がバレて捕まったら、それはそうなる運命だったんだって、そこまで覚悟を決めたの。だから、これが私のラストシヤフルだったの…でも恭平は変わらない、変わらないんだよね。

恭平 そうか、そんな事考えてたのか、それで…お前本当めでたいな。そうだよ、俺は俺、変わりようが無いんだよ、どこまで行ってもちゃらんぼらんの負犬だよ。分ったらどっちか選べよ、このまま俺と一緒に爺さんの金を巻き上げるか、愛想を尽かして逃げ出すか、二つに一つだ。

久美 恭平って普段強がったり大きな事ばかり言ってるくせに、酔ったりすると俺は負犬だって言うよね、でも飲んでない恭平からそれを聞いたのは今日が初めて、きっとそれが本音なんだよね。でも私は、恭平って負犬にもなれないって思う。だって戦わないんだよ、自分の弱さと戦わないんだよ。

恭平 偉そうな事言うな。

久美 恭平今まで本気で努力した事なんて無いでしょう。人の誠意に応えようって頑張ったりとか、

恭平

誰かのために死に物狂いになったりとか、そんな経験無いんだよね。一度でもそんな事があつたら、きつと全然違つてたと思う。

久美

人間として基本的な事じゃない、それが分らないからちやんと生きて行けないんだよ。

恭平

ああ分らないね、努力して何だよ、誠意って何だよ。物事成るようにしか成らないし、誰かの為に一生懸命なんて奴に限って足下すくわれて痛い目に遭うんだよ。

久美

：おしまいだね：（立ち去ろうする）

恭平

（叫ぶ）待てよ。（立ち止まる久美、ゆっくりと振り返る）：俺にだつてあつたさ：馬鹿みたいに頑張つてた時が。（久美を見据える）：もう七、八年も前の話だよ。地方の三流大学を出た後、俺は親父がやつてた小さな会社に入って営業回りをしてた。革製品の製造販売：俺はまだ青かったから、先輩達に負けまいと必死こいてた。親が社長つてプレッシャーもあつたしな。新人なんだから地道に古い客のケアだけやつてりや良かったのに、新規の客を開拓してみんなをあつと言わせたかった。それでうまい話に引かかちまつた。ものすごい大口の契約持ちかけられて有頂天になった。慎重にやつた方がいいって忠告してくれた先輩もいたけど、そんな時の俺の耳には届かなかつた。とにかく親父を喜ばせたかったんだよ。ガキの頃から親の期待に応えた事なんて無かつたからさ。親父が俺の頭冷やしてくれりや良かったけど、今考えたら、親父は俺以上に舞い上がつてたんだよ、出来の悪い息子が初めてまともな事をしたつてんで、工場はフル稼働させ、職人達には休み返上で頑張られて檄を飛ばしたよ。そうやって納入した商品の代金が不当たり手形さ。取り込み詐欺、品物だけ持つて代金は払わずにドロロンするつていう典型的なやり方だよ。残つた負債は半端な額じゃなかつたね。仕入れの代金は勿論、社員に給料も払えないし、親父は頭床に擦りつけて謝つて回つた：惨めだったよ、本当惨めだった。俺はさ、親父にぶん殴つて欲しかつたよ「馬鹿野郎、お前のせいで」って怒鳴つて欲しかつた、だけど親父は俺に一言も言わねえのな。そして、会社をたたんで一月もしない内に、死んじまつた。

久美

えっ、

恭平

自殺した…遺書には、元の従業員と迷惑をかけた取引先に詫げる言葉ばかりで、最後まで俺には一言も残してくれなかった、最後まで…。

久美

そんな話、してくれた事なかったね。

恭平

自慢するような話じゃないからな。まあ、親父は何も言わなかったけど気持は伝わったよ、身にしみた。出来の悪い奴が身の程知らずに頑張っても、はた迷惑なだけだったな。

久美

…お父さん、本当にそう思ってたのかな。

恭平

そうだよ。

久美

…ねえ、息子の政伸って、きつと恭平に似てるんじゃない。

恭平

何だよそれ、

久美

似てるどころがあるから間違えたんじゃない。

恭平

何言ってるんだよ。

久美

あんまり仲のいい親子じゃないよね、初めての夜だって私の事を「どうせお前が連れてきたんだからろくな奴じゃないだろ」って言ってもん。

恭平

そんな事言ってたな。

久美

相変わらず口数は少ないけど、今はね、私がかかるとありがたいとうって言うってくれる時もある

の。それで、昨日ね：政伸を宜しく頼みますって、言ったの。

恭平 …俺にはあの晩以来ほとんど一言も無いけどな。

久美 でも、宜しく頼みますって言ったのよ、恭平には何も言わなくても。

(久美を見る恭平、しばしの間、奥の方で倒れる音)

久美 お父さん、(慌てて奥へ) 恭平、恭平、

(奥へ走る恭平。暗転)

(明るくなり、部屋の中央に座っている文代。側に大きなスーツケース。立ち上がり下手の植え込みを眺める)

文代 まったく、鍵も掛けずにどこに行ったのかしら。(冷蔵庫を開け) お水頂きますよ。(ミネラル

ウォーターを取り出すが、コップがない、コップを取りに奥へ)

(重吉の車イスを押して恭平と久美登場)

久美 本当びっくりしちやっただけど、大したこと無くて良かった。

重吉 すまん。

久美 私の方こそごめんなさい、お父さんがトイレに行ってるのを忘れちゃうなんて。

久美 政伸、お願い、(重吉をベッドに寝かせるのを)

恭平 …ああ、(二人で重吉をベッドに寝かせる)

久美 ゆっくり休んでくださいね。(重吉すぐに眠る。恭平に)貧血なんて、女性だけの病気かと思っ
てた。

恭平 (何か考え事をしている様子) うん、

久美 これからは、もっと気を付けないとね。

恭平 久美、あのな、

久美 話の続きだったら、後にして、

恭平 …、

(文代、奥からコップを持って登場。驚いて文代を見つめる二人)

久美 あの、どちら様でしょう。

文代 政伸かい、

恭平 えっ…ええ、

文代 (じつと恭平を見ているが、寝ている重吉の方に歩み寄り、顔を覗き込み、小さな声で) 兄さ
ん、

久美 えっ、

文代、文代が帰ったわよ、 (久美を見る)

久美

さつきトイレで倒れて、今、病院に行つて来たところなんです。

文代

倒れたつて、卒中とか、

久美

いえ、貧血です。でも胃が荒れてるみたいで、潰瘍からの慢性の出血が原因かも知れないつて、来週精密検査をする事になりましたけど、とりあえず命に別状はないつて、

文代

良かった。

久美

あの、

文代

(重吉を) この人の妹。政伸、大きくなつたね。

恭平

(顔を背けるように) は、はい、

文代

こつち向いて顔見せなさいよ。(恭平の顔を両手で挟みじつと見るが) もう面影も無いわね。

恭平

あの、

文代

覚えてないでしょう。いいのよ、だってあなたまだこんな小さかったから、でも、文代叔母さんつて、お父さんから聞いた事位あるでしょう。

恭平

あ、はあ、

文代

何よ、全然聞いてないの：呆れたわね。(重吉を) まったくこの人ときたら。あたしはあんたの叔母さん、ずっとアメリカに行つて、三十年ぶりにあんたのお父さんに呼び出されて帰つて来たのよ。

恭平　　そうですね。

文代　　（久美を）この人は、奥さん？

恭平　　近々、

文代　　そう、

久美　　久美と言います。

文代　　よろしくお願いね。それにしてもあの政伸が……でもそうよね、三十年だもんね。子供がいてもおかしくないのよね。

恭平　　お帰り、なさい。

文代　　でも驚いたわよ、お父さんの手紙ではあなたはもう何年も帰ってないって言ってたのよ。音信不通だったって、

恭平　　はあ、

文代　　そうそう、あなたのお父さん、手紙に書いた住所がいいかげんだったから、あたしこんな荷物もってあち行ったりこち行ったり、もう大変だったのよ。

恭平　　そうですね。

文代　　交番で聞いてもこんな住所じゃ分らないって言われるし、最後は区役所行って住民票見せて貰って、それだつて親族の証明だ何だつてうるさいのよ、ほら私証明書なんてアメリカのパスポートしか無いでしょ、規則がどうのこうのって、もう頭にきたから怒鳴りつけてやったわよ、そしたら福祉課の何とかさんがたまたま聞きつけて、そのお爺さんだったら近頃ご家族の

方が何度か相談に見えてますよって、びっくりしたわよ、家族なんて息子のあんたしかいないでしょ、それで帰ってるんだって分かったのよ。

恭平 はあ、

文代 あたしが今度帰って来たんだって、あんたの事が一番大きな理由なのよ。

恭平 はあ、

文代 まあ、その話は後でゆっくりしましょう。それで、この人、兄さんはどうなの、もう症状は随分進んでるの、アルツハイマーなんでしょう。

久美 ええ、意識は、比較的はつきりしてる時と、そうでない時があって、それと足が弱ってるので車イスを使ってます。

文代 そう、車イス…もっと早く来たかったんだけどね、手紙は一年前に貰ってたのよ。でも私の方も、向こうで旦那の看病してたもんだからさ、アメリカ人の。

久美 そうなんですか。

文代 そうなのよ、それが先日亡くなって、悲しいけど、それでやっと帰って来れたって訳なの。

久美 大変でしたね。

文代 政伸、お父さんがこうなったのは、あんたが心配させたせいもあると思うよ。

恭平 すみません、

文代 でもね、親つてのは有り難いもんだよ、(手紙を取り出し使せんを数枚めくり) 読んでごらん、

(恭平に渡す) あんたにもそれなりの財産を残したいんだってさ。

恭平 財産、(手紙を読む) ははは、結構、有るんだね。

久美 ちよっと、

恭平 (久美に小声) すごい、すごいぞ、

文代 初めてくれた手紙がこんなに長くて驚いたわよ。愛想のない頑固な性格だったけど、病気の事を知って、随分心細くなってたんだね。あんたの事一杯書いてるでしょ、ちよと貸して(手紙を取り、便せんをめくり) ここあんたに読ませようと思って赤線引いたから。

恭平 どうも、(手紙を受け取り読む)

文代 あんたがくれたのも家を飛び出したのも、自分が仕事ばかりで家族を顧みなかったせいだつて、小さい時のあんたに優しい言葉一つかけてあげなかつたつて、謝ってるのよ。あんたのお母さんが早く亡くなつたのも自分が大事にしなかつたせいだつて…あんた、お母さんの事では随分お父さんを責めたんだつてね、許しておやりよ、私らの頃の日本人はね、一生懸命働く事以外、家族を大事にする方法なんて教わつて無いのよ。(涙ぐむ)

久美 あの、(ハンカチ)

文代 ありがとう、ごめんなさいね、着いて早々、

久美 叔母さん、私達、お父さんの財産はいりません。

恭平 おい久美、

久美 まだ若いから、そんなお金が入ったらかえつて人生踏み外しちゃうかも知れませんし、二人で

頑張りたいので、

文代

あら、

恭平

久美、何もそんな話今しなくても、

文代

政伸、あんたいい人見つけたみたいだね。久美さん、安心して、兄さんはね、自分の病気が進む事を見越して、判断力が亡くなってからじゃダメだからって、私を財産の後見人にするって、この書類を作って同封して来たのよ。だから、もしまたこの政伸が馬鹿な事をするようだったら、そのまますんなりお金を渡すなんて事は、この私がしないから、

久美

そうなんですか、

文代

しばらくはここに住まわせて貰って、あんた達の生活を見せて貰うわよ。

恭平

えっ、

文代

荷物解きたいんだけど、空いてる部屋はあるかしら、

久美

あ、はい、どうぞ、（奥へ案内しながら退場）奥の二部屋空いてますから、どちらでも、あつ、洗面所は…。

恭平

（奥を覗いた後、暫く考えている）なるようになるさ。

（スポーツ新聞を拾う恭平、しばしの間、新聞を丸め、ゴミ箱の中へ。二階から持ってきていた置物を暫く眺めた後、エレベーターに乗り込む。照明暗くなる）

（明るくなり、奥から久美登場、重吉の甚平を持っている）

久美 お父さん、お出かけですよ、着替えて下さいね。(着替えさせながら) 政伸、政伸、

文代 (奥より登場) あら久美さん、出かけるの、

久美 お父さんの病院です。お昼キッチンの方に用意してありますから。召し上がって下さい。

文代 悪いわね。

恭平 (奥より登場) 何だよ久美、でかい声出して、

文代 政伸、何時まで寝てるのよあんたは、

恭平 すみません、夕べ就職活動で遅かったんで、

文代 毎日出かけてるのに、ちっとも決まらないのね。

(恭平、笑ってごまかす)

久美 政伸、玄関の下駄箱の上に私の日傘があるから、お父さんの車イスに固定して。

恭平 どういう事、

久美 昨日言ったじゃない、日差しが強いからお父さんに日傘を差してあげたいって、ほら、私両手

ふさがってるでしょう、だから、

恭平 ああ、そんな事言ったな…帽子無いのか、

久美 あるけど、被らせてもお父さんすぐに取っちゃうのよ、頭蒸れるのが嫌みたい。

恭平　これに日傘、どうやって固定しよう。

久美　針金でちよちよいのちよいつて、自分が言ったんじゃない。

恭平　分ったよ、了解了解、任せて頂戴（上手ドアに走る。暗転）

（闇の中、忍び込む政伸）

政伸　（ベッドに近づきながら）何でまだ生きてんだよ。（顔を覗き込み）世話やかせやがって、（馬乗りになる。文代、奥より登場）くたばれ、

誰、（照明を点ける。首を絞めた形で固まっている政伸と目が合う）：何やってるの、人殺し、

政伸　静かにしろ（文代を捕まえようとする）

文代　（上手ドアから逃げ出す）助けて、誰か、

政伸　（捕まえて引き戻し）静かにしろって言うてんだろ、

人殺し、

政伸　（口を押さえ）静かにしないと本当に殺すぞ、

うぐ、うぐ、

恭平　（奥より登場）何やってんだ、（飛びかかる）

政伸　うわ、（文代、上手ドアより逃げ出す）

恭平 (羽交い締め) おとなしくしろ、

政伸 放せ、放せ、このく、(腕を返して逆転) どうだ、

恭平 うう、くそ、痛、ててて、

政伸 どうだこの野郎、

恭平 いて、ててて、

久美 (登場) 恭平、何なの、この人誰、

恭平 久美、

久美 (引き離そうとする) やめて、放して、

文代 (声) おまわりさん、早く、

山内 (声) 早くって、あの、

政伸 どけ、(久美を突き飛ばす)

久美 痛っ、

恭平 この野郎く、(そして上になったり下になったり)

文代 (上手ドアより登場) おまわりさん、(山内登場) 早く助けて、

山内 助けてって、

文代 何やってんのよ、早く

山内 (上になった恭平を) おとなしくしろ、

恭平 うわ、(山内、政伸の二人に取り押さえられ) 何すんだよ、

久美 逆です、逆、

文代 反対よ、反対、

山内 え、こつちか、

政伸 やめろ、くそ、

恭平 どうだ、この野郎、

政伸 (取り押さえられ) ちくしょう、

恭平 おばさん、大丈夫、

文代 私は大丈夫よ、(重吉に駆け寄り) 大丈夫、

重吉 うん、まだ腹は減ってない。

文代 何言ってるのよ、もう、あくでも良かった。

久美 (恭平に) 誰なのこの人、

政伸
くそ、放せ、

山内
(政伸の頭を叩く) 静かにしろ、

政伸
いて、

山内
(恭平に) あの、何があったの、こいつ何したの、

恭平
(文代に) 何したの、

文代
何って、この人、この人、年寄りに馬乗りになって首絞めて、

山内
えっ、

文代
とにかく人殺しなのよ、早く、早く手錠かけなさいよ。

山内
分った、(ネクタイを外し手を縛り始める)

文代
何やってるのよ、

山内
手錠なんか無いよ、俺ガードマン、

文代
ガードマン、

山内
バイトだけだね、これから深夜の道路工事、交通整理に行くところ、

文代
そうなの…紛らわしい、

山内 何勝手な事言ってるんだよ。

恭平 でも、助かったよ、ありがとう。

山内 交番に突き出すんだろ、駅に行くついでだから一緒に行ってやるよ。

恭平 交番、交番ね、どうしようかな、

文代 情けかけちゃダメよ。

恭平 そうだけど、

政伸 お前ら、(叫ぶ) お前ら誰だよ。(一同驚いて政伸に注目) 何でここに居るんだよ。

文代 何この人、急に怒鳴って、

恭平 この野郎、開き直るのか、

政伸 うるせえ、お前ら何者だ、

恭平 何だ、

政伸 俺はこの家の人間だ、そこでニタニタ笑ってるジジイの息子だ。(押さえていた恭平と山内をはね飛ばし、座る) お前らの方こそ警察に訴えてやるぞ、

山内 あれ、どうなってんの。

(文代、政伸の顔をまじまじと見る)

文代

…政伸かい。

政伸

誰だよ、あんた。

政伸

(文代、振り返り恭平達を見る、そして再び政伸を見つめた後、平手打ち) て、何すんだよ、

文代

私はあんたのお父さんの妹、アメリカに行った叔母さんだよ。

政伸

…文代、叔母さん。

文代

親に手を掛けるなんて、この子は、この子は、(平手打ち乱打)

政伸

痛、痛、痛いよ、叔母さん、

山内

まあ、まあ、まあ、(止める)

文代

(泣く) 情けない、情けないよ、政伸、あんた見下げ果てた男になってしまったね。(山内に) お巡りさん、やっぱり連れてって頂戴、親を殺そうとしたんだよこの男は。

山内

だから、俺はガードマンだって、

文代

何でもいいから、この情けない男を、叩き出して頂戴。(泣)

山内

何だか家族の問題みたいだし、俺、帰らせて貰うわ。でも、ネクタイだけは…いいや、あげるよ。(退場)

恭平

ありがとうな。

文代 情けない、情けないよ、

恭平 ……久美、俺たちも、荷物まとめるか。(立ち去ろうとする)

文代 ちよつと、

恭平 はい、

文代 説明、しなきゃでしょう。

恭平 そうだよね…俺たちはその、たまたまこの家の前を通りかかって、

久美 恭平、本当の事を話そう。

恭平 久美、

初めの動機はともかく、私もう、何だかお父さんや叔母さんの事が本当の家族みたいな気がしてるから、嘘をついたままでお別れしたくない。

恭平 久美、あのな、

久美 叔母さん、ごめんなさい、私達二人、

文代 その話、やっぱりいいわ。

久美 えっ、

文代 うん、いい。

久美

でも、

文代

話してくれても、それが本当かどうかなんて私には分らないでしょう、また嘘かもしれないし。

久美

…すみません。

文代

久美さん、私に分っている事はね、あんた達と初めて会った日、兄さんの世話をしていたのがあんた達だったって事。

久美

えっ、

文代

それから、久美さんが色んな資料を取り寄せてまでこの人の病気を理解しようと頑張ってくれてる事、日傘くくり付けた車イスを、自分は真っ赤になって汗流しながら押してくれてる事、それは私がこの目で見て分っている事実なの。

久美

でも、私達は、

文代

どういう経緯でこうなったかは知らないけど、実の親の命を狙う程の悪事を働いた訳じゃないでしょ。

久美

叔母さん、

文代

どうしても話したかったら別の日にして頂戴、同じ屋根の下に住んでるんだもん、いつでも話せるでしょう。

(顔を見合わず恭平と久美)

政伸 あ の、叔母さん、いいかげんにこれ解いてくれよ。

文代 何言ってるの、あんたは許さないよ。政伸、親を殺そうとするなんて、どういう了見なの、

政伸 ……しようがなかったんだよ。

文代 ……しようがないですって、親の首を絞めといて、しようがないなんて言訳が通じると思ってるの。

政伸 親だと思ったら出来ないさ、親父だって俺の事を息子だなんて思っちゃいないんだ、そこそこはお互い様だよ。

文代 あんたって子は、

政伸 叔母さん、何も俺だっていきなり首を絞めた訳じゃないよ……どうしてもさ、どうしてもまともった金が必要で……ちゃんと頭下げて頼んだんだよ。

文代 何言ってるの、忍び込んできて寝てる相手にいきなり馬乗りになって首絞めたんじゃないの。

政伸 今夜の話じゃないよ、

文代 ……どういふ事、

政伸 三週間前……俺はちゃんと頭下げて、金はくれとは言わない、貸してくれるだけでいいからって、親父に頼んだんだよ。

恭平 三週間前、(顔を見合わず恭平と久美)

政伸 こっちだって元々縁切ってたつもの親父だ、頼みたくは無かったさ。だけどどうしようも無

くて、恥忍んで頭下げたのに、お前なんか息子じゃないと来た、あげくの果てに泥棒とか強盗だとか言いたい放題だ。ああそうですかだよ、それだったらこっちだつて親だなんて思わないさ、強盗って言われたんだ、強盗らしくじじい殺してでも金を取ってやろうつて、そう思つたんだよ。

恭平 それで、親父さんを壁とベッドの間に挟んで、放置したんだ。

久美 えっ、

恭平 動けなくして放つておいて、死ぬのを待つてたんだ。

久美 じゃあ、もしかして、車イスがエレベーターの中にあつたのも、

恭平 当然、親父さんには出来ないさ、ブレーカーが落ちてたのもそうだよ。

政伸 お前ら、本当に誰だよ、

久美 でも、どうして、

恭平 親父さんは金を貸さない、家捜ししても大した物が見つからない、だから、遺産つて形で合法的に金を得る事にした、そんなところかな。

政伸 ふん、

恭平 久しぶりに帰つた息子が発見して通報する、警察が調べても死因は衰弱死、あるいは餓死、疑う奴はいないだろ。

政伸 勿体付けやがつて、どうせじじいから聞いたんだろ。

恭平 親父さんは何も言わないさ。

政伸 嘘つけ、

文代 今のは、本当の話なんだね、政伸、

政伸 ああそうだよ。こっちは急いでんだ、自然にくたばるのなんか待ってらんねえ。ちつ、うまく行くと思ってたのに、戻って見たらじじいはピンピンしてやがる、しょうがないから…こうなったんだよ。

文代 本当に、あんたって子は、

政伸 (周りの視線に) 何だよ、

文代 政伸、あんたに訊くけど、もしも、お父さんがあんたに、お前は息子じゃ無いって、言わなかったら、ただお金を貸してくれなかっただけなら、あんたはこんな事しなかったのかね。

政伸 …さあな、

文代 ちゃんと答えなさい。

政伸 …多分、こんな事まではしなかったよ。だけど、恨んでる事に変わりは無いさ。

文代 そう、

政伸 ふん、親子の縁なんかこっちから願ひ下げだ。親父、黙ってないで何とか言ったらどうなんだ。俺があんたに我慢できねえのは、そうやってあんたが自分だけ立派だと思ってるよ。こなんだよ。

文代 政伸、お前は本当に、馬鹿な子だね。

政伸 何だよ、

恭平 政伸さん、親父さんはあなたの事、大事に思ってるよ。

政伸 だからお前誰だよ。

恭平 俺は、政伸。

政伸 ふざけやがって、

恭平 (文代に) あの手紙、見せてやってよ。

文代 そうね。(奥へ)

久美 政伸さん、お父さんはね、アルツハイマーなの。

政伸 えっ、

久美 だから、本当に政伸さんの事が分らなかったのよ。

政伸 …親父が、

恭平 俺の事をあんただと思ってるさ、政伸、政伸って呼ぶんだよ。

政伸 …アルツハイマー。

恭平 でもあんたラッキーだよ…親なんて、本当に死んじゃったら、取り返しがつかない。

久美

…恭平、

文代

(手紙を持って奥より登場) 政伸、一年前にあなたの父さんが私にくれた手紙だよ。(渡す) 読んでごらん、

恭平

あつ、ちよつと、(手紙を取り、ページをめくる) 特にこの赤線のところしつかり。(渡す)

(読み始める政伸、顔色が変わる、上手端に座り込んで食い入るように読む。暫くして、キャッチボールの真似をする重吉)

文代

兄さん、何やってるの、

久美

お父さん、近所の草野球チームの人達と仲良しで、良く一緒にキャッチボールの真似をするの。

恭平

そういや、このところ来てないな、イールスの奴ら。

久美

そうね、ここ何日か全然、

恭平

久美、キャッチボールやろう。

久美

キャッチボール、

恭平

(車イスを重吉の前に) 親父さん、さつ、(車イスに重吉を座らせながら) 今日には格好だけじゃなくて、(手伝う久美) 本当にキャッチボール見せてやるよ。

久美

キャッチボールつて、恭平、

恭平 清さん達が忘れてったボールとグローブあったよな。

久美 う、うん、（開き戸からボールとグローブを取り出す）でも、恭平、私野球なんて、

恭平 俺だって出来ないさ、緩いボール投げるだけだよ。（重吉を舞台中央に据え）さ、親父さん見てよ。

（舞台面、上手に恭平、下手に久美、キャッチボールを始める。楽しそうに見ている重吉。重吉の後に回り、見守る文代）

恭平 いくぞ、

久美 ゆっくりよ、ゆっくり、

恭平 そら、（投げて）今のストライクだろ。

久美 ボール、

恭平 いい玉だったけどな、

久美 いくよ、よいしょっと、（投げる）

恭平 （捕球）何だよ、よいしょって（笑）

（政伸のすすり泣きが聞こえ、振り返る二人）

恭平 よし、今度こそストライクだ、

久美 強く投げちゃダメよ、

(投げる恭平、捕球する久美)

恭平 お前けっこう上手いよ、

久美 ちよつと楽しい、

恭平 よし、(座って構える) フォークボール来い、

久美 何よそれ、

重吉 政伸、

恭平 ん、

重吉 政伸、

恭平 (政伸に) おい、おい、

(肩をふるわせて泣いている政伸、振り返らない)

文代 政伸、政伸、

(振り返る政伸、泣いていて顔がくしゃくしゃ、声が出ない)

恭平 (代わりに) 何だい、父さん、

重吉 …すまん、

恭平 えっ、

重吉 ……キャッチボール、してやらなかった。(涙)

恭平 ……いいんだよ、いいんだよ父さん、

重吉 ゆっくり、話した事も、なかった…許してくれ。

恭平 ……何泣いてんだよ、父さん。

重吉 ……仕事ばかりで、う、うう、

恭平 ……もういいよ、もういいよ、父さん、

重吉 ……いつも、うまい言葉がみつからなかった。

恭平 父さん、

重吉 ……だから、何も言わなかった。

恭平 ……父さん、

重吉 ちゃんと話せば良かったんだ、いつもお前の事を考えていたんだから。

恭平 俺の方こそ、俺の方こそ…ごめんな、父さん、本当にごめんな、父さん。

(舞台下手、窓の外にこの情景を見守るイーリスの面々…暗転)

(明るくなり、しばらくして上手ドアより恭平登場。電話が鳴る)

恭平

(子機を取り上げ) はい、もしもし、あつ、何だよ久しぶり、どうしたの、清さん達とかみんな元気、いや、急に来なくなつたからどうしたんだろうって、久美と話してたんだよ。うんそうだね。あつママ、貰つた電話で何だけど、先に俺の話聞いてくれる、俺思い出したよ、ママも人が悪いな、ちゃんと言つてよ。何がって、ほら、初めての夜さ、いや、だから夜中ここにみんなが乱入して来たあの夜、俺にさ、弁護士さん、なんて訊いたじゃん、何でそんな事言うんだろうって思ったけど、思い出したよ。俺、あの少し前に、向日葵に行った事あつたんだよ。いや、清さんとかの事は覚えてたんだけど、ママお店では着物だつたでしょう、まったく分らなかつたよ。俺、めっちゃ恥ずかしい、手握つて口説いたりしなかつた、酔うとやっちゃやう) うん、うん、そうだね、あ、それでそちらの用件は、うん、うん、えつ、分つた、うん。もちろんだよ。それでさ、俺今日ね、駅前で向日葵を探したんだよ、だけど、見つけれなくて、あれ、ママ、ママ、聞いてる、切れちゃつた。(子機を戻す)

久美

向日葵のママ、

恭平

うん、

久美

何だつて、

恭平

…お前の事をもっと大事にしろつて、

久美

えつ、

恭平

変だよな。

久美

ねえ、朝からどこに行つてたの。

恭平 うん、実はな、

久美 何よ、

恭平 仕事、決めてきた。

久美 え、

恭平 仕事、決めてきた。

久美 本当、

恭平 うん、

久美 何、

恭平 スーパーの店員、

久美 スーパー、

恭平 ああ、ノリんちの店だよ、とりあえず、社会人再出発って感じだな。

久美 …… 恭平、

恭平 何だよ、

久美 頑張ってるね。

恭平 ああ、

久美

良かった。ノリさん何か言ってた。

恭平

いや、あいつにはまだ話してないよ。

久美

話してないって、

恭平

本当に必要だったら雇って貰いたいけど、オーナーの息子の友達って理由で採用されたくないだろ。

久美

じゃあノリさん知らないの、お店にはいなかったんだ。

恭平

うん、いなかった。募集の張り紙出てたからさ、それを見たんだけどって、面接して貰ったんだよ。

久美

そうか、じゃあ恭平が入ったって知ったらびっくりするね。

恭平

喜んでくれると思うよ、しつこかったもんだ職に付けて。

久美

ありがたいよね、私にはイールス様々、

恭平

でもな、変なんだよな、

久美

何が、

恭平

いや、ノリだけじゃなくて、豆腐屋のりっちゃんも、魚金の清さんも、それからペットショップでバイトしてる公ちゃんも、店覗いたんだけど、誰もいないんだよ。考えたら、商店街歩いてイールスのみんなに会った事ないもん。あいつら毎日昼間から野球やってるんじゃないかな。

久美 まさか、

恭平 だよな。あれ、親父さん達は、

久美 三人でお墓参り、政伸さんのお母さんの。

恭平 そうか。

久美 政伸さん、すっかり変わったね。車イス押すのも楽しそうだもん。

恭平 なあ、政伸さんの借金ってどれ位あんのかな。

久美 叔母さんがね、定期預金の分だけで返せる額だって言ってたよ。でもまだ政伸さんには渡さな
いって。

恭平 えっ、定期預金って、

久美 大事な物は、みんな車イスのシートの下に隠してあったから、叔母さんに渡したの。

恭平 お前、知ってたのか、

久美 うん、毎日介護してたら気づくよ。

恭平 そうか、教えてくれなくて、ありがとう。(笑う久美) 仕事も決まったからさ、次はアパート探
しだな。

久美 この近所にしてね、私、しばらくはここに通うつもりだから、いいでしょ。

恭平 断られるまでやったらいいさ、俺も手伝うよ。

(ドアホーンの音)

恭平 出るよ。(上手ドアより退場。玄関から恭平の声) 知ってますよ、知ってます、とにかく入って下さいよ。

国江田(声) え、あれ、あれ、入ってくださいって、何ですか、いきなり、私まだ名前も、

恭平 (国江田を引っ張って、上手より登場) おい、久美、国江田さん、ついにいらっしやっただよ民生委員の国江田さん、

久美 はじめまして、

国江田 はじめまして、いや、えっ、どうして私の名前を、

恭平 民生委員って言ったら国江田さん、色々噂は伺ってますよ。

国江田 噂、

恭平 イールスのみんなから、

国江田 えっ、

恭平 久美、お茶頼むよ。

久美 はいはい、(奥へ)

国江田 あ、あの、お構いなく。

恭平 遠慮はしないでくださいよ、国江田さんも俺たちの恩人なんだから。

国江田 あの、どういう事でしょうか、恩人とか、イールスとかって、

恭平 国江田さんの一言で、清さんがここに来て、それで俺達も住むようになって、えっと、とにかく色々ありまして、家族円満になり、俺が定職に就いたっていう話なんですよ。

国江田 よく分らないんですが、あの、とりあえず、お宅様は、

恭平 俺、横田恭平、えっと、ここの、家族の端くれみたいな者、

国江田 横田さん、遠縁の方か何かで、

恭平 まあ、そんな感じかな。

国江田 それで、こちらのご隠居は、

恭平 息子の政伸さんてのが帰ってて、今日は一緒に墓参り。

国江田 そうなんですか。

久美 (盆に乗せたお茶を持って登場) どうぞ、

恭平 (久美を) かみさん、

国江田 どうも、あの、この地区の民生委員で国江田といいます。

恭平 だからそれはもう分ってますって。

国江田 一応、あの、挨拶ですから、

久美 久美といえます。

国江田 よろしくお願ひします。ところであの、先程イールスの事を話してらっしゃったようですが、ご存知なんですか。

恭平 ご存知も何も、清さん達とは毎晩一緒に勉強したりふざけあったりで、

国江田 ……そうですか、いや、実は今日伺ったのはですね、その魚金の清さんはじめ、あの事故で亡くなった七人の慰霊碑がやっと出来ましたので、除幕式には是非こちらのご隠居にご出席願ひたいと思ひまして。

恭平 えっ、

久美 あの、亡くなったって、誰が。

国江田 ですから、やっとイールスの慰霊碑が出来ましたので、費用のほとんどを出して頂いたご隠居には、

恭平 だから、何でイールスの慰霊碑なんだよ。あんた清さんが亡くなったみたいなき事言っただけ、清さんはノリやタンキチと一緒に、先週までほとんど毎晩ここに来てたよ。

国江田 あの、ノリやタンキチ君は私も良く知ってますよ。残念ながら、二人も一年前のあの事故で、亡くなってます。

久美 一年前、

恭平 何馬鹿な事言っただよ、国江田さんでもっとまともな人かと思っただのに、何だよ、縁起でもない。

国江田 いや、しかし、

久美 あの、その事故で亡くなったのは、

国江田 メンバーと、応援してた女の子達、特に仲の良かった七人が同じマイクロに乗ってたんですよ。

久美 七人、

国江田 ちようど一年になります。試合の帰り、高速を走ってた時に夕立に降られたんですよ。あつという間に路面が川のようになったらしいです。それで、ハンドルを取られて…。

恭平 そんな馬鹿な話が、

国江田 みんな実によく青年ばかりだったんです。こちらのご隠居とは色々有ったようですが、喧嘩をする程仲が良いって、そんな関係だったんですよ。だから、ご隠居も事故のすぐ後に、慰霊碑を建てたい、費用は自分が負担するからって、これ、あの、町内会の会報です。（会報を差し出す）除幕式の話が出てまして、七人の写真も、ここに、

恭平 （会報の写真を指さしながら）清さん、ノリ、タンキチ、

久美 律子さん、敏子さん、公子さんもいる、向日葵のママも、

恭平 でたらめだよこんなの、久美、何とか言ってくれよ、俺たちずっと清さん達と、なあ、久美、

久美 そうなんです、私達ここ一ヶ月ずっとイールスのみんなと一緒に、お父さんの介護をしてたん

です。

恭平　イールスのおかげで俺はやっとまともな道に戻れて、この親父さんは命を落とさずに済んで、てことは息子の政伸さんだって清さん達にたすけられたんだよ。

久美　一年前の事故でなんて言われても、私達、

恭平　だったら国江田さん、ママの店、スナック向日葵はどうなってるんですか。

国江田　事故から三月で、新しいテナントが入って、まったく別の店になってます。

恭平　それおかしいよ、だってさ、俺一月前、確かに向日葵で飲んで、清さん達がここの親父さんの噂してるのを聞いたんだよ。それで俺達この屋敷に来て、縁もゆかりも無かったこの屋敷に来て、

久美　あの、(グローブを取りに行く) これ、忘れてったんです、清さんとノリさん、ここに名前も、

恭平　国江田さん、本当なんだよ、本当に俺達、

国江田　(グローブを見つめる) ……これ、事故の後、見つからなかったって聞いてます……そうですか……イールスのみんなが、お二人をここに呼んだんですね……私は信じますよ、信じますとも。それ位やりかねない連中でしたから……常識はないけど元気があって、人なつこくて……お節介な奴らでした。

恭平　……じゃあ、本当に清さん達は……

国江田　きつとご隠居の事が気になって、そんな事をしたんでしよう。人助けだなんて思っちゃいないんですよ。そうしたくてたまらなかつたんですよ。

久美

あっ…向日葵のママが言ってた…お手伝いしてるつもりなんか更々無い、自分たちに出来ない事を、私達にして貰ってるって…。

国江田

そうですか…そうですか。

終り

本作品の一部または全部を、無断複製、引用、改定することは、いかなる形であれこれを禁じます。また著者に無断での公演もできません。